

# 全国国衆ガイド

戦国の“地元”の殿様“たち

大石泰史 編

天下取りから、

大名から、

それとも……

滅亡か!?

激動の戦国時代を駆け抜けた、“地元”の殿様、約514氏を総まとめ!



全国国衆ガイド

戦国の“地元の殿様”たち

大石泰史 編

星海社

70



SEIKAISHA  
SHINSHO



まえがき  
新たな戦国史研究の一步に向けて

編者 大石泰史

国衆は「地元の殿様」

「地元の殿様」といった場合、読者の中には江戸時代の藩主を思い浮かべる方が多いのではなからうか。しかし、そもそも藩主とは、多くが江戸で生まれ、江戸で育ち、その後、江戸幕府によって藩主に任命され、決められた任国へ赴くものである。

出羽国庄内の酒井氏のように、江戸時代を通じてその領国を治める場合もあるが、一代限り、または数年で移動(転封)する場合もあった。すると藩主への「地元の殿様」という表現は、はたして妥当なのかという疑問が湧いてくる。

一方、本書の「国衆」とは、詳細は後述するが、戦国大名より規模は小さいながらも在地を支配した領主のことで、彼らは在地に根付き、地元への統制力や指導力、軍事力や税の徴収権等を持っていた。在地に密着していた彼らだからこそ、その地域の領域化を図る「大名」らは、国衆を無碍に扱うことはせず、ときに外敵から彼らを守り、ときに敵対しながらも、

存在自体を認めていた。つまり、国衆こそが「地元の殿様」の称号がふさわしいと言える。

国衆という見慣れない言葉で、読者は「？」と感じたかもしれないが、彼らこそ「地元の殿様」であり、彼らを理解して戦国時代を見直したい、という思いで本書を製作した。

## 戦国時代とはいかなる時代か

戦国時代は全国で長期にわたって戦乱が繰り返された時代で、語感からすれば、「大量殺戮さつりくの時代」と認識されやすい。

そうした「負」のイメージとは裏腹に、戦国時代は現代人の中で幕末と並んで人気がある。人気の背景の一つには、戦国期の大名クラスの者たちに焦点が当てられ、その人物の持つドラマ性が現代人の共感を呼んでいることがあるのかもしれない。しかし、このような人気はいまに始まったことではない。例えば大河ドラマのタイトルが公表されると、それに登場する人物の関連書籍が刊行され、当時の情勢や主人公の人物像の説明が一気に進む。玉石混淆ぎよくせきごんこうの場合もあるが、戦国史研究にとって、これは喜ぶべきことでもある。

その一方で、戦国時代の研究は基礎的事実の解明にも目を配っていた。「半手はんて」という言葉をご存じだろうか。簡単に言うと、例えばA・B二人の領主が隣接しているとき、その両者

に挟まれた地域の村Cなどは、A・B両者の領域内における他の村の税よりも少ない金額ではあるが、A・B両者に税を払う。それによってCは自らの領域への不可侵をA・Bに承認させ、村の安定を図った。「半手」の村が存在する、という基礎的なことが明らかになったため、当時の村の見直しがなされるようになった。

このように基礎的な問題を説明していくと、根本的な問題にも改めて目を向ける必要に迫られるようになった。戦国時代はいつから、なぜ、どのように始まったのか？ また、戦国時代の終焉をいつにするのか、なぜ終わらせることができたのか？ 教科書の記述は正しかったのか？ こうした「謎」の解明も人々の興味を惹く要因なのかもしれないが、戦国時代はまだまだわからないことだらけ、というのが実情である。

ただ一つ明言できるのは、戦国時代は「地方の時代」ということである。特に戦国中々後期（和暦では天文〜天正期）は、「群雄割拠ぐんゆうかくきよから天下統一へ」と称されるように、將軍の権威が失墜した京きやう都とよりも、むしろ地方ちほうにおいて「戦国大名」がいくつもの国を治め、君臨した時代である。彼らは自らの領国で農業・鉱業開発に努め、流通とともに商業活動を推進した。また、それまで「自力救済じりききゆうさい」と呼ばれる、百姓等が自らの力量で解決していた訴訟について、大名が法的・機構的な整備も行って訴訟を吸い上げて判決を下し、罰を与えるところにもまで関与した。こうした彼らの政策や経営・訴訟方法の一部は、江戸時代にも受け継

がれた。戦国期の様々な文書が従来と比較にならないほど全国的に増え、現代まで代々引き継がれているということこそが、戦国時代Ⅱ「地方の時代」とされる証<sup>あかし</sup>と言える。

「戦国大名」とはどのような存在か

かつての高校の教科書などでは、「戦国大名の登場」という項目を立て、「検地を行い」「分国法を制定」したのが戦国大名である、とされたが、現在では「検地や分国法の制定を行った」人物が戦国大名であるとの表現はなくなった。これは、じつは「戦国大名」という文言の概念が曖昧で、基礎的な面で問題があったからである。少し述べておこう。

戦国期の検地は、在地から年貢<sup>ねんぐ</sup>高等<sup>たか</sup>等を大名に差し出す「指出<sup>さしだし</sup>検地」であった。これは、システム的には室町時代から「検注」と呼ばれて行われていた。つまり、戦国期とそれ以前で大差がなかったことがわかってきた。また詳細は省略するが、根本から言えば、羽柴（豊臣）秀吉が行った「太閤検地」も極端に変わりは無いことも判明した。すると、室町〜豊臣、さらには江戸期の「大名」の本質的な差をどこに見出すのか、不明確になってしまった。

次に分国法は、戦国期以前においてははいわゆる「慣習法」の存在が大きく、そうした意味では「成文化」したことに意義を見出せるが、結局その慣習法すべてを成文化し尽くした訳



でもなかった。さらに、数ヶ国に版図を広げた「大名」と、一ヶ国あるいは一国にも満たない「大名」もいたが、彼らをそもそも同じ土俵に上げて良いのか、といった問題もあった。これらが考慮され、この二点による「戦国大名の認定」に至らなかつたと考えられる。

こうして研究が進展すると、「戦国大名」という概念そのものに対する疑問も生じ始めた。彼らの出自は、甲斐武田氏は守護、尾張織田氏は守護代、さらには奥羽伊達氏は「国人」とされるなど、様々であつた。彼らは「大名」であり続けるために、自らを律し、前代の領主以上に民衆に配慮した政策を行つた。農・鉞・商業等の推進政策はその裏返しで、彼らは居城となる「本城」や政治的・軍事的な「支城」を持ち、城下には彼らに従う被官や商人・職人等を居住させた。このような「気配りの行き届いた」政治権力を保持・維持する一方、軍事的に盟主として君臨してした氏族が「戦国大名」として存在していたのである。

その一方で、「大名」と似ていながらも、本質的に違いの無い「城持」の武将の存在が注目されるようになった。つまり、従来「大名」と認識されていた氏族よりも小規模で「大名」と呼びにくいものの、彼らの家臣と違って「独自」に文書を発給する存在に視点が集まりだしたのである。それが本書のタイトルとなつている「国衆」である。国衆の解明は大名の位置付けを相対的に理解することに繋がるため、その研究自体、非常に重要なことと言えよう。まさに、戦国史研究が新しい段階に入ったのである。

## 戦国期を生きた国衆

戦国時代は鬪争の時代で、その時代を生き抜こうとしたのは、大名ばかりではない。百姓や町人もしかり、また国衆たちも同様で、「大名」の領域の辺境に拠点のあった彼らは、生き抜くために誰と手を結ぶのが最良かを模索した。彼らは自らを保護してくれる領主を選択し、選択が成功すれば領域は安堵された。その最も好例とされるのは松平氏（のちの徳川家）であろう。

松平氏は、じつのところ出自がはっきりしない。室町期には守護でもなく、また最初から「大名」であったわけでもなかった。ただ、室町幕府の政所まんどころしつじ執事（政所は幕府の財政と領地に関する機関で、執事は長官のこと）であった伊勢氏に仕えていたことだけは間違いない。その松平氏は、東は駿河・遠江を領国とする今川氏、西は尾張を治めていた織田氏に挟まれた「三河国衆」の一族であった。元康もとやす（のちの徳川家康）が人質として尾張や駿河へと移ったのは有名な話である。それが、織田信長に付くことで領域が安堵され、年代が降るにしたがつてさらに規模も拡大し、最終的に「大名」へと転化して、征夷大將軍にまで昇ったのである。

一方、国衆の中には、松平氏のような者ばかりが存在していたのではない。二〇一二年に

公開された『のぼうの城』という映画は、同名の歴史小説（原作：和田竜）の映画化で、物語の中心となったのは、成田氏という武蔵国忍城、（行田市）に実在した氏族であった。彼らは平安期には存在が確認され、その後、領域を拡大し、戦国期にはまさに「地元の殿様」Ⅱ国衆となった。物語における当主・氏長による小田原北条氏の本拠・小田原城（神奈川県小田原市）への籠城や、秀吉（指揮を執ったのは石田三成）による忍城の水攻めも歴史的な事実であり、結局、彼らは小田原合戦で北条氏に従ったため、没落の道を歩むことになった（黒田基樹編『論集 戦国大名と国衆 7 武蔵成田氏』岩田書院）。

このように江戸期まで生存していた氏族（成田氏も一応、江戸前期まで継続していた）は、生き残りに成功した武将たちであった。彼らは生存を賭けて、和平・従属・抗戦といった決定を下した。その方針は、領主の一族や被官といった家臣との合議で決めていた。こうした家臣等の構造は、「大名」たちのそれとまったく同じである。全国各地には様々な、またかなり多くの「地元の殿様」が存在しており、その実態解明が研究の俎上<sup>そじょう</sup>に上ってきたのである。

## 国衆とは何者か

改めて国衆について、具体的に述べよう。国衆とは学術的な用語である。「●●」の国の人

（「●●国衆」）のような史料文言に由来するが、なぜこの学術用語が使用されるようになったのか。かつての研究者たちは室町期の研究で使用していた「国人」という表現を多用していたが、戦国時代の領主を「国人」とするには妥当でない側面も多かった。こうした研究状況を受け、おもに東日本の研究者が国衆と表現するようになったのである。

では、なぜ国衆の名辞を東日本の研究者が多用するのか。それは、国衆の研究が東日本を中心に進められたからである。一方、西日本では、すでに一九五四年に「国衆」の文言に注目した研究があった（河合正治「戦国大名としての毛利氏の性格」『戦国大名論集14 毛利氏の研究』吉川弘文館初出：一九五四年）。ここでは国衆が、「独立した姿で毛利氏の旗本に入り、毛利と同盟関係を結んだが、毛利氏は「かれらを家臣団化することが容易にできずその統制に苦し」んだと指摘している。毛利の家臣は「家中」と呼ばれていたが、この論文によって「家中」には国衆が存在し、彼らは独立性を持った氏族であった、という点が認識された。

こうしてみると、東よりも西の方が早くから国衆に注目していたかのように見える。しかし、西日本では実際の国衆研究はあまり進展しなかった（村井良介「総論 安芸毛利氏をめぐる研究について」同編『論集 戦国大名と国衆17 安芸毛利氏』岩田書院）。

それでは、厳密な意味での国衆とはどういった存在なのか。国衆の研究を牽引してきた黒田基樹氏は、簡単に述べると以下のように規定した（同『戦国大名』平凡社新書713）。

- 1 国衆は自ら郡規模の領域を持つ
- 2 平時における国衆の領域は独立性が保たれ、基本的に大名の介入を受けない
- 3 国衆は大名と起請文（お互いに神仏にかけて誓約した文書）を交換し、証人（人質）を提出して契約関係を結ぶ
- 4 大名は国衆の存立を認める代わりに、国衆が軍事的な奉公を大名に対して実践するとい  
う、双方が互いに義務を果たす
- 5 特に3・4との関連で大名とは従属的な関係となるが、その際には特定の取次（とりつぎ）という人脈・ルートによって統制される

前述の成田氏の場合、起請文は残っていないが五条件をほぼクリアしており、拠点のある忍城が武蔵であるため、「武蔵国衆」と認定される。また西日本では、例えば瀬戸内水軍の一翼として著名な伊予国の能島村（のしまむらかみ）上氏は、五条件のうち1の「郡規模」という点については彼らの水軍という性格上、測りかねるものの、領域はかなり広いことがわかっている。その他、3の証人についてもはっきりしないが、それ以外はクリアしていることから、「伊予国衆」と表記しても問題ないと思われる。

## 史料に見る国衆

本書が『国衆ガイド』と謳<sup>うた</sup>う以上、基本的には黒田氏の定義に従って前記五つの規定を満たす氏族を紹介する。しかし、西日本においては、現在どういった氏族が国衆であるのか、といった研究があまり行われてこなかった状況にある。すると、黒田氏の基準で西日本の氏族を語ることが好ましいのかどうか、疑問を呈する方もおられるであろう。

そこで、現在残されている史料にどのように見えるのか、改めて史料に立ち帰る必要がある。その史料とはイエズス会宣教師<sup>せんきょうし</sup>の書翰<sup>しょかん</sup>等である（柴裕之氏の教示）。宣教師らは、主に戦国後々末期に西国で活動していたため、時期的にも地域的にも限定される側面は否めない。また、彼らの証言<sup>しやうげん</sup>に受発給文書等には宗教的主観が含まれている面が多分にあるのも事実である。しかし、彼らが同時代に生きた倭人<sup>わじん</sup>に日本人たちの動向や発言を見聞し、文字に残していたことは間違いない。その彼らの証言を無視するのはいかにも勿体ないことである。

著名な宣教師の一人に、ルイス・フロイスがいる。彼は、現在、戦国期の貴重な情報を提供してくれる『日本史』を記したことで知られている。その彼が、肥前以外の地を訪れたことのないポルトガル商人が同国内の湊に入つた際、商人たちが湊の支配者を「国王」と呼び、

その領国を「王国」と称しているのは誤りで、母国における「侯（＝侯爵、大石注）」に相当する自分たちの特定の称号を持っていて、それを屋形ヤカタと称するのだ、としている。

さらに、その「屋形」は、身分の高い家臣や諸城主、また幾つかの地方の支配者で、「殿」と称しており、平戸・志岐・天草といった「諸地域の殿」のこととしている（柳谷武夫訳、フロイス『日本史』緒言：①）。これを見ると、ポルトガル商人らは、肥前国内の湊に君臨する支配者（フロイスの日本人との付き合いからすれば、例えば有馬氏や大村氏等）を「国王」と誤まるほどの権力者と認識していた。一方のフロイスは、湊の支配者とされる人物は「国王」ではなく「屋形」であり、「殿」と称される人物である、と認識していたことがわかる。

また、彼がイエズス会総長に宛てた天正十六年二月二十日の書簡によると、母国で国王に相当する称号を日本では屋形と称し、自国の中に国衆と呼ばれる「殿」を持っているため、互いに騒ぎを起こし謀叛むほんし易い、と述べている（『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第7巻：②）。これは、①で示された「屋形」の許に「国衆」が存在していたことを暗示しており、彼らの存在が謀叛の原因となりやすかった情勢をも指摘しているのである。すなわち、屋形は各国の大名クラスのこと、その領国には国衆が厳然として存在しており、彼らの胸三寸で領国に謀叛が勃発する状況にあったことがわかるのである。

さらにもう一人、宣教師アレシヤンドウロ・ヴァリニャーノによると、領国内の最高の者

は「屋形」と称せられるいわば国王で、その下に「国衆クニタテ」と称される、母国で言う公・侯・伯爵に該当する人物が存在すること、彼らは八、一〇、一二ぐらいに区分される「国クニ」と称せられる領域を有しており、彼等はその領主であるから「国衆」と称される、と述べている（『日本諸事要録（1583年）』松田毅一ほか訳『日本巡察記』…③）。つまり、八、一〇、一二ぐらいに区分される「国」とは、おそらく郡のことを示しているので、国衆はかなりの郡規模の領域を有しながらも、屋形二大名クラスの下に存在していたことを記述したのである。

## 本書における国衆の定義

このように見てくると、宣教師の史料からは、

- a 大名クラスの許で、その領国下に存在する氏族（②・③より）
- b 大規模な郡規模の領域を有する氏族（②・③より）
- c 地方の支配者で、「殿」と呼ばれて、大名クラスの「王国」と間違われるほどの「国二郡」を領土・領域として有する二自立的な氏族（①より）
- d 「国王」である守護クラスの人物と誤認されるほどの権力を有する、身分の高い家臣や諸



城主、地方の支配者Ⅱ自律的・自立的な氏族(①より)

e 大名領国下で、大名に対して謀叛を起こしやすい氏族(②より)

という点が見出せる。黒田氏による五つの規定と同内容の部分(例えばb)もあるが、それよりも黒田氏規定の2・4を補強している感がある(例えばc・d)。つまり、国衆の特徴として強調すべきは、彼らが大名クラスの氏族とほとんど変わりはなく、自立性・自律性を有した氏族、ということであろう。従来とは別の史料から確認される国衆の一面面として、改めて指摘しておきたい。なおeは、謀叛を起こした氏族すべてが必ずしも国衆とは言えないが、機会や背景・基盤・情勢等の「条件次第で大名権力に反発する素地を有した氏族」ということとなる。これも政治的・経済的に自立していたからこそ大名への反抗が可能だったのだから、こうした氏族を国衆とするのも強<sup>あなが</sup>ち無理な設定とは言えないようにも思える。

そこで本書では、黒田氏の提示した「五条件」と、宣教師史料から導かれた「五条件」のいずれかを満たしている氏族を国衆と定義づけてみた。本来ならばこれらの条件すべてをクリアすることが不可欠だが、それを全領主にあてはめることができるとは思えない。現在残されている史料は限りがあり、その史料に基づいて研究者は論を組み立てているからである。先述の成田氏でさえ起請文がないという「欠陥」がある。

それでも、自立的・自律的な活動をしている国衆が存在し、彼らの動向が「大名」の行く末をも左右していた可能性があったということを知ってもらえれば、今後の研究の進展も図れるのではないかと考えている。

例えば、織田信長・徳川家康の連合軍と武田勝頼軍が三河国長篠城ながしの（新城市）をめぐる争った著名な長篠合戦に関する研究は、主に信長包囲網（反織田連合）、信長の鉄炮戦術（丁数及び「三段撃ち」と武田軍の戦法（武田騎馬隊）、さらに敗北した武田氏の弱体化などが中心であった。これまでその原因については、単に大名による「領域拡大戦争の一環としての長篠城の奪い合い」といったイメージだけで、具体的な解答を得ていなかったのである。しかし、柴裕之氏は国衆を検討する中で、長篠城も属す奥三河地域では、いくつ存在していた国衆の内部が親武田派と親徳川派に分裂しており、その政治的解決及び国衆領域の存立確保が求められたために勝頼は出陣したこと、つまり長篠合戦は、国境地域の存立確保のために惹き起こされた戦争（「国郡境目相論」という）であったことを明らかにした（付論 長篠合戦再考）同著『戦国・織豊期大名徳川氏の領国支配』岩田書院、二〇一四）。

大名が自身の領国を安定化させるためには、こうした紛争を滞りなく解決することが求められていた。大名が存立を賭けた戦いのきっかけは、国衆の存亡を賭けた内部情勢によっていたのである。本書において「国衆」をあえて採り上げたのは、大名と国衆両者の位置づけ

を見直すことで、まさに新たな「戦国大名」像に近づこうと考えてのことなのである。

## 国衆とその地域的な特徴

こうした点に留意して、本書では東北Ⅱ四九、北関東Ⅱ三八、南関東・伊豆Ⅱ四二、北陸Ⅱ三六、甲信Ⅱ三三、中部Ⅱ一三、東海Ⅱ四一、畿内Ⅱ七二、中国Ⅱ七〇、四国Ⅱ二五、九州北部Ⅱ六八、九州南部Ⅱ二七、総計五一四の氏族を掲出した。この地域区分も、戦国期の政治状況や歴史的・文化的背景等を踏まえて区分けした。

読者の中には「なぜこの氏族が掲載されないのか？」といった疑問を呈する方もいると思う。しかし、これは室町・戦国期における在地状況や各地の国衆研究の進展、さらには限られた残存史料等の問題に関係している。少し説明しておこう。

例えば、国衆は大名の本城近くに居城を持っていない。駿河葛山かすらやま氏のように、今川氏の城下「府中」（＝駿府、静岡市葵区）に屋敷をもらい、そこに居住することはあっても、葛山氏は居城・葛山城（裾野市）を捨てたり、自身の手で破壊したりすることはなかった。すると大名の本城があったとされる地域は、自ずと本書では扱われなくなる。

また加賀国は長享二年、一向宗門徒によって守護が逐おわられて不在となった。戦国期にいわ

ば「守護大名」から「戦国大名」へと転ずる一族がいなくなったということは、国衆が頼ることのできる勢力（Ⅱ「大名」）の選択肢の一つを欠如させたことになる。つまり、守護不在自体が「加賀国の特色」の一つと考えることもできよう。そのため、在地状況による特徴Ⅱ地域的特徴として、加賀国内で掲出する国衆の数を無闇に増やすようなことはしなかった。

この二点を踏まえて周防・長門を見てみると、両国では、周防大内氏の下の被官として存在していた氏族がほとんどとなる。とすると、両国には国衆がいなかったとも考えられる。しかし、それは現在の研究状況から判断されるだけであり、今後、いずれかの氏族が国衆と認定されるかもしれない。本書では、とりあえず「守護代」級の氏族を提示してみた。

また、先のように国衆を定義づけると、有力な国衆の一族の扱い（例えば三河松平氏の「十八松平氏」など）についても考慮しなければならない。その場合は個別に検討し、紙数の制限等も踏まえて、あえて採録しなかった一族もある。ご了承いただきたい。

## 本書の構成

本書で紹介される国衆と構成を簡単にまとめておこう。

古代においては在庁ざいちよう官人かんじん（古代官衙かんがにおいて、国司の許で事務を行った下級官僚）であった氏

族や、開発領主としてすでに在地に根付いていたことを匂わす氏族が存在する一方で、まったく不明である場合もある。鎌倉期には御家人として活動している氏族もおり、南北朝期には、例えば守護が南朝だからといって、国衆は必ず対立していた北朝となっていたというわけでもない。こうした古代く中世中頃までの情報のうち、特に古代に関する部分は全国的に系譜類に頼らざるを得ないところが多い。しかし、中世以降に関しては、九州などには史料が多く残されているので、国衆の動向も明確となる。

こうした中世前期以前の存在形態に関する記述は、氏族名の下か脇に一括して表記し、本文では中世後期以降のものを中心に記載した。国衆の概念は戦国期に限定されるので、中世前半以前に関する記載は最小限で良いと判断したのである。読者が興味を抱いた国衆はいろいろ史料に登場するののか、といった目安として利用していただければ、と考えている。

次に、氏族名の下に家紋を示した場合がある。家紋は一族意識を抱かせる紋章として有効であるが、中世におけるその使用例は非常に限られており、不明な点が多い。戦国期では、越後上杉氏が永禄四年前後に「関東幕注文」（上杉家文書）を作成していて、この頃における関東の武将等の紋所を知ることができる。また、武将が大紋だいもん（直垂に大きな文様）家紋を入れた礼装。鎌倉以降から着用され始め、室町以降に大紋と呼ばれるようになり、紋所も定位置に配されるようになった）を着て肖像画等を作成していれば、武将の生存中に使用していた家紋を知

ることも可能となる。そのため、家紋が明確となる氏族はそのまま提示することにした。

しかし、現在もその家紋が使用されていれば問題ないが、わからないものも存在する。つまり、「関東幕注文」で名称のみ判明しながらも図像が不明、ということがある。その場合、いわゆる「表紋おもてもん」と呼ばれる氏族の中で比較的多く用いられていたであろう家紋を提示する、あるいは近世まで継続した氏族であったならば、『寛永諸家系図伝』『寛政重修諸家譜』等といった公的に作成された系譜類等に記載のある家紋を提示することにした。本書では、大名の一族であっても自立性・自律性のある氏族は国衆と規定した（小田原北条氏の一門「玉繩北条氏なむ」も掲載）。家紋はそれを視覚的にも認識できるツールと判断し、曖昧な情報を含む場合もあつて読者に誤解を与える恐れもあるが、わかる範囲で家紋も紹介することにした。

本文では、各氏族の紹介にあたって三段階に区分した。というのは、現在の史料の残り具合等により、研究の蓄積に幅が生まれるのは当然のことであるため、研究の進んでいる氏族は様々な内容を記すことができるので、長文の解説を施した。一方、関係史料は少なくとも、明らかに自立性を想定できる氏族も存在する。彼らを紹介する文章の短い理由が、重要な存在ではないから、あるいは領域が狭いから、などということ短文にしたのではない。単に、現時点における史料の残存や研究状況だけの問題であるので、ご理解いただきたい。

また、巻末に参考文献を提示した。国衆の活動を詳細に知りたい読者は、自治体史などに

具体的な史料やエピソード等が紹介されているので、そちらの参照をお薦めする。

その一方で、各章末には語彙ごい解説を、巻末には和暦西暦対応表も付してある。これは、本書が「戦国時代を知っている人」を対象に編まれていたため、それほど詳しくない人が読んでも理解してもらえらるるよう、と考えて提示したものである。特に語彙解説は、最新の研究状況や、これまであまり指摘されてこなかった事実等にも配慮しているので、歴史に詳しいと自認される方々も、一度は目を通していただければ、新たな発見があると思う。

なお、章扉の地図では、現行の県境を示していない。それは、国衆が旧国郡に領域を有し、領域も明確でない場合があるためである。

## 地域散策への誘い

最後に改めて述べておきたいのは、本書で示した国衆は、現在残っている史料の中でも受・発給文書、さらに様々な角度から内容を検討し、間違いなく戦国期の情勢を語っているであろう史資料から構築されたものである。近世・近代の資料に見られる、後世に仕えた主君や徳川將軍家に迎合した系図・家譜類等は、参考程度にしか使用していない。そのため、まさに実在した“地元の殿様”の姿を浮き彫りにしたガイドブックになったと自負している。

本書を一読し、“地元の殿様”の理解をより一層深めたうえで、ぜひ国衆が活躍した地域に足を運んでほしい。彼らが生きた時代と違って、風景もだいぶ変わっているだろう。それでも雰囲気を感じることでできる場所は、まだ残っているはずだ。本書は、これまで紹介されてきた書物よりも、最新で、なおかつ正確な内容を記している。本書から得た知識をもって現地を散策すれば、紹介した国衆たちの“生の姿”をより身近に感じ取れると思う。

彼らを知ること、地域の再発見の第一歩に繋がるし、戦国史の研究自体も新たな段階へと入ることができる。戦国期における彼らの歴史的事実を網羅している本書が、読者のさらなる次のステップへのスタートとして活かされれば、と願っている。

※各国衆の本文中に、人物や地名、合戦や事変等に★を付した部分があります。

各章末に掲げた語彙解説に対応していますので、併せてご参照いただければ幸いです。



第一章 東北地域 東部・西部

東部地域総論..... 32

- 大浦氏..... 34
- 浪岡北畠氏..... 35
- 七戸氏..... 35
- 八戸氏..... 36
- 九戸氏..... 37
- 四戸氏..... 38
- 一戸氏..... 38
- 久慈氏..... 38
- 斯波氏..... 39
- 稗貫氏..... 39
- 柏山氏..... 39
- 和賀氏..... 40
- 浜田氏..... 41
- 熊谷氏..... 41
- 本吉氏..... 42
- 富沢氏..... 42

- 山内首藤氏..... 43
- 登米氏..... 43
- 長江氏..... 44
- 黒川氏..... 44
- 留守氏..... 45
- 国分氏..... 46
- 亘理氏..... 46
- 相馬氏..... 47
- 大内氏..... 48
- 畠山氏..... 48
- 二階堂氏..... 48
- 田村氏..... 49
- 白河氏..... 50
- 石川氏..... 51
- 山内氏..... 51
- 岩城氏..... 52
- 長沼氏..... 53
- 河原田氏..... 53

- 浅利氏..... 56
- 豊島氏..... 57
- 六郷氏..... 57
- 戸沢氏..... 58
- 西馬音内氏..... 59
- 赤宇曾氏..... 59
- 砂越氏..... 59
- 大宝寺氏..... 60
- 仁賀保氏..... 61
- 土佐林氏..... 61
- 庭月氏..... 62
- 鮭延氏..... 62
- 天童氏..... 63
- 白鳥氏..... 64
- 寒河江氏..... 64
- (語彙解説)..... 65

西部地域総論..... 54

第二章 北関東地域

コラム 松前氏..... 70

地域総論..... 74

- 小山氏..... 76
- 皆川氏..... 77
- 足利長尾氏..... 78
- 佐野氏..... 78
- 壬生氏..... 79
- 塩谷氏..... 79
- 茂木氏..... 80
- 武茂氏..... 80
- 大田原氏..... 80
- 大関氏..... 81
- 白井長尾氏..... 81
- 長野氏..... 82
- 横瀬氏..... 83

●小幡氏	84
●総社長尾氏	85
●和田氏	85
●安中氏	85
●斎藤氏	86
●沼田氏	86
●那波氏	86
●桐生佐野氏	87
●富岡氏	87
●赤井氏	87
●大塚氏	88
●江戸氏	89
●小田氏	90
●額田小野崎氏	91
●真壁氏	91
●土岐氏	92
●鹿島氏	92
●穴戸氏	93
●岡見氏	93
●菅谷氏	94
●芹澤氏	94
●畑田氏	94
●笠間氏	95

●石神小野崎氏	95
●山尾小野崎氏	95
《語彙解説》	96
第三章 南関東地域	
地域総論	104
●成田氏	106
●長井氏	107
●深谷上杉氏	107
●木戸氏	107
●騎西小田氏	108
●上田氏	108
●岩付太田氏	109
●藤田氏	110
●三田氏	110
●江戸太田氏	111
●大石氏	111
●三浦氏	112
●玉縄北条氏	113
●大森氏	114

●松田氏	114
●内藤氏	115
●清水氏	115
●富永氏	116
●井田氏	116
●万喜土岐氏	116
●真里谷武田氏	117
●長南武田氏	117
●東金酒井氏	118
●土気酒井氏	118
●勝浦正木氏	119
●小田喜正木氏	120
●秋元氏	121
●山室氏	121
●内房正木氏	122
●多賀谷氏	123
●白井原氏	123
●大須賀氏	124
●海上氏	124
●山川氏	124
●国分氏	125
●府川豊島氏	125
●白井氏	126

●相馬氏	126
●高城氏	127
●水谷氏	127
●築田氏	128
●千葉氏	129
《語彙解説》	130
第四章 北陸地域 東部・西部	
東部地域総論	138
●本庄氏	140
●色部氏	141
●上田長尾氏	141
●鮎川氏	142
●中条氏	142
●新発田氏	143
●古志長尾氏	143
●北条氏	144
●上条氏	144
●斎藤氏	145
●安田氏	145

●柿崎氏	145
●本間氏	146
●齋藤氏	146
●神保氏	147
●椎名氏	148
●松波氏	148
●長氏	149
●得田氏	149
●温井氏	150
●平氏	150
●三宅氏	151
●遊佐氏	151
東部地域総論	152
●洲崎氏	154
●鈴木氏	154
●嫡木氏	155
●敦賀朝倉氏	155
●堀江氏	156
●鞍谷氏	157
●千福氏	157
●大野朝倉氏	158
●内藤氏	158

●栗谷氏	159
●熊谷氏	159
●逸見氏	160
●白井氏	160
〈語彙解説〉	161
第五章 甲信地域	
地域総論	170
●小山田氏	172
●上野原加藤氏	173
●大井氏	173
●油川氏	173
●穴山氏	174
●岩手氏	175
●今井氏	175
●勝沼今井氏	175
●栗原氏	176
●高梨氏	176
●市川氏	176
●大日方氏	177

●栗田氏	177
●島津氏	177
●真田氏	178
●屋代氏	178
●海野氏	180
●禰津氏	180
●望月氏	180
●室賀氏	181
●大井氏	181
●伴野氏	182
●香坂氏	182
●蘆田依田氏	183
●阿江木依田氏	183
●下条氏	184
●仁科氏	184
●青柳氏	184
●木曾氏	185
●諏方氏	185
●高遠諏方氏	186
●松尾小笠原氏	186
●知久氏	186
〈語彙解説〉	187

第五章 中部地域	
地域総論	194
●遠山氏	196
●遠藤氏	197
●国枝氏	198
●安藤氏	198
●稻葉氏	199
●氏家氏	199
●竹中氏	200
●不破氏	200
●市橋氏	201
●丸茂氏	201
●江馬氏	202
●三木氏	203
●内島氏	204
〈語彙解説〉	205
第四章 東海地域	
東部・西部	

東部地域総論……………210

西部地域総論……………224

〔語彙解説〕……………238

●須智氏……………261

●久下氏……………261

●夜久氏……………261

●荻野氏……………262

●赤井氏……………263

●伊賀氏……………263

●延永氏……………264

●石川氏……………265

●小倉氏……………266

●革嶋氏……………266

●竹田氏……………267

●鶏冠井氏……………267

●物集女氏……………268

●調子氏……………268

●神足氏……………269

●狛氏……………269

●真木島氏……………270

●野田氏……………270

●秋山氏……………271

●沢氏……………271

●芳野氏……………272

●古市氏……………272

●筒井氏……………273

●葛山氏……………212

●興津氏……………212

●富士氏……………213

●飯尾氏……………213

●井伊氏……………214

●天野氏……………215

●朝比奈氏……………216

●大沢氏……………216

●小笠原氏……………217

●奥山氏……………217

●戸田氏……………218

●安城松平氏……………219

●田峯菅沼氏……………220

●奥平氏……………220

●西郷氏……………221

●牧野氏……………221

●鵜殿氏……………222

●吉良氏……………222

●長篠菅沼氏……………223

●大給松平氏……………223

●鱸氏……………223

●水野氏……………226

●清洲織田氏……………227

●岩倉織田氏……………228

●山口氏……………228

●勝幡織田氏……………229

●那古野今川氏……………229

●久松氏……………230

●佐治氏……………230

●長野氏……………231

●木造氏……………232

●関氏……………233

●神戸氏……………233

●田丸氏……………234

●梅戸氏……………234

●大河内氏……………235

●坂内氏……………235

●田矢氏……………236

●福地氏……………236

●越賀氏……………236

●九鬼氏……………237

### 第八章 畿内地域

地域総論……………248

●浅井氏……………252

●朽木氏……………253

●大原氏……………254

●蒲生氏……………254

●山中氏……………255

●新庄氏……………255

●青地氏……………256

●三雲氏……………256

●伊庭氏……………256

●多賀氏……………257

●磯野氏……………257

●小島氏……………257

●内藤氏……………258

●宇津氏……………259

●波々伯部氏……………259

●波多野氏……………260

● 十市氏	274
● 箸尾氏	274
● 越智氏	275
● 布施氏	276
● 檜原氏	276
● 吐田氏	277
● 鈴木氏	277
● 湯河氏	278
● 玉置氏	279
● 山本氏	280
● 田代氏	281
● 玉井氏	281
● 松浦氏	282
● 淡輪氏	283
● 日根野氏	283
● 土屋氏	284
● 瓦林氏	284
● 芥川氏	285
● 茨木氏	285
● 三宅氏	286
● 鳥養氏	286
● 池田氏	287
● 吹田氏	288

● 能勢氏	288
● 伊丹氏	289
● 有馬氏	290
● 塩川氏	291
● 上月氏	291
● 別所氏	292
● 小寺氏	293
● 依藤氏	294
● 宇野氏	294
● 龍野赤松氏	295
《語彙解説》	296
第九章 中国地域	
東部・西部	
東部地域総論	310
● 太田垣氏	312
● 垣屋氏	313
● 長氏	314
● 八木氏	314
● 田公氏	315
● 田結庄氏	315

● 吉岡氏	315
● 武田氏	316
● 三上氏	317
● 矢部氏	317
● 斎藤氏	318
● 後藤氏	318
● 三浦氏	319
● 草苺氏	319
● 江見氏	320
● 中村氏	320
● 芦田氏	320
● 行松氏	321
● 小鴨氏	321
● 南条氏	322
● 村上氏	323
● 山田氏	323
● 松田氏	324
● 明石氏	324
● 浦上氏	325
● 宇喜多氏	326
● 穰所氏	327
● 伊賀氏	327
● 石川氏	327

● 三村氏	328
● 庄氏	329
● 清水氏	329
西部地域総論	330
● 杉原氏	332
● 三吉氏	332
● 山内氏	333
● 和智氏	334
● 吉川氏	335
● 小早川氏	336
● 武田氏	337
● 阿曾沼氏	337
● 天野氏	338
● 熊谷氏	339
● 穴戸氏	339
● 平賀氏	340
● 因島村上氏	341
● 松田氏	342
● 三沢氏	342
● 三刀屋氏	343
● 牛尾氏	343
● 赤穴氏	344

第十章 四国地域

地域総論

- 米原氏 ..... 345
- 神西氏 ..... 345
- 馬木氏 ..... 346
- 鞍掛氏 ..... 346
- 熊野氏 ..... 347
- 隱岐氏 ..... 347
- 小笠原氏 ..... 348
- 益田氏 ..... 349
- 周布氏 ..... 349
- 三隅氏 ..... 350
- 福屋氏 ..... 350
- 吉見氏 ..... 351
- 高橋氏 ..... 352
- 石見吉川氏 ..... 353
- 内藤氏 ..... 354
- 陶氏 ..... 355
- 間田氏 ..... 356
- 仁保氏 ..... 356
- 弘中氏 ..... 357
- 杉氏 ..... 357
- 《語彙解説》 ..... 358

- 安宅氏 ..... 370
- 篠原氏 ..... 371
- 大西氏 ..... 371
- 新開氏 ..... 372
- 伊沢氏 ..... 372
- 一宮氏 ..... 373
- 森氏 ..... 373
- 十河氏 ..... 374
- 香川氏 ..... 375
- 香西氏 ..... 376
- 安富氏 ..... 377
- 羽床氏 ..... 378
- 吉良氏 ..... 378
- 一条氏 ..... 379
- 香宗我部氏 ..... 380
- 津野氏 ..... 380
- 本山氏 ..... 381
- 安芸氏 ..... 382
- 大平氏 ..... 382
- 地域総論 ..... 368

第十一章 九州北部地域

- 山田氏 ..... 383
- 西園寺氏 ..... 383
- 河野氏 ..... 384
- 采島村上氏 ..... 385
- 能島村上氏 ..... 386
- 金子氏 ..... 387
- 《語彙解説》 ..... 388

九州北部地域

地域総論

- 城井氏 ..... 369
- 佐田氏 ..... 397
- 門司氏 ..... 397
- 長野氏 ..... 398
- 野仲氏 ..... 398
- 朽網氏 ..... 399
- 一万田氏 ..... 399
- 佐伯氏 ..... 400
- 南志賀氏 ..... 400
- 北志賀氏 ..... 401
- 地域総論 ..... 394

- 田原氏 ..... 402
- 武蔵田原氏 ..... 403
- 日田氏 ..... 403
- 戸次氏 ..... 404
- 吉弘氏 ..... 404
- 田北氏 ..... 405
- 入田氏 ..... 405
- 佐須氏 ..... 405
- 宗氏 ..... 406
- 高橋氏 ..... 407
- 杉氏 ..... 407
- 宗像氏 ..... 408
- 秋月氏 ..... 409
- 千手氏 ..... 410
- 原田氏 ..... 410
- 下蒲池氏 ..... 411
- 上蒲池氏 ..... 411
- 草野氏 ..... 412
- 上妻氏 ..... 412
- 黒木氏 ..... 413
- 五条氏 ..... 413
- 田尻氏 ..... 413
- 星野氏 ..... 413

●三池氏	415
●高良山座主家	415
●三原氏	416
●問注所氏	416
●波多氏	417
●日高氏	417
●龍造寺氏	418
●筑紫氏	419
●江上氏	419
●横岳氏	420
●神代氏	420
●宇久氏	420
●平戸松浦氏	421
●相神浦松浦氏	421
●千葉氏	422
●後藤氏	422
●波多氏	423
●鶴田氏	423
●大村氏	424
●西郷氏	424
●有馬氏	425
●深堀氏	426
●小代氏	426

●阿蘇氏	427
●甲斐氏	428
●内空閑氏	428
●合志氏	428
●天草五人衆	429
●鹿子木氏	429
●城氏	430
●赤星氏	430
●隈部氏	430
●宇土氏	431
●名和氏	431
●相良氏	432
〔語彙解説〕	433
●北原氏	445
●新納氏	448
●三田井氏	448
●米良氏	449
●加治木肝付氏	449
●肝付氏	450
●菱刈氏	451
●種子島氏	452
●祢寝氏	452
●本田氏	453
●樺山氏	453
●伊地知氏	454
●伊集院氏	454
●島津薩州家	455
●入来院氏	456
●伊作氏	457
●島津相州家	457
●祁答院氏	458
●東郷氏	458
●頼娃氏	459
●佐多氏	459
●川上氏	460
●喜入氏	460

第十一章 九州南部地域

地域総論

●伊東氏	444
●島津豊州家	445
●北郷氏	446
●土持氏	445

〔語彙解説〕

コラム尚氏

和暦西暦対応表

参考文献

執筆者紹介

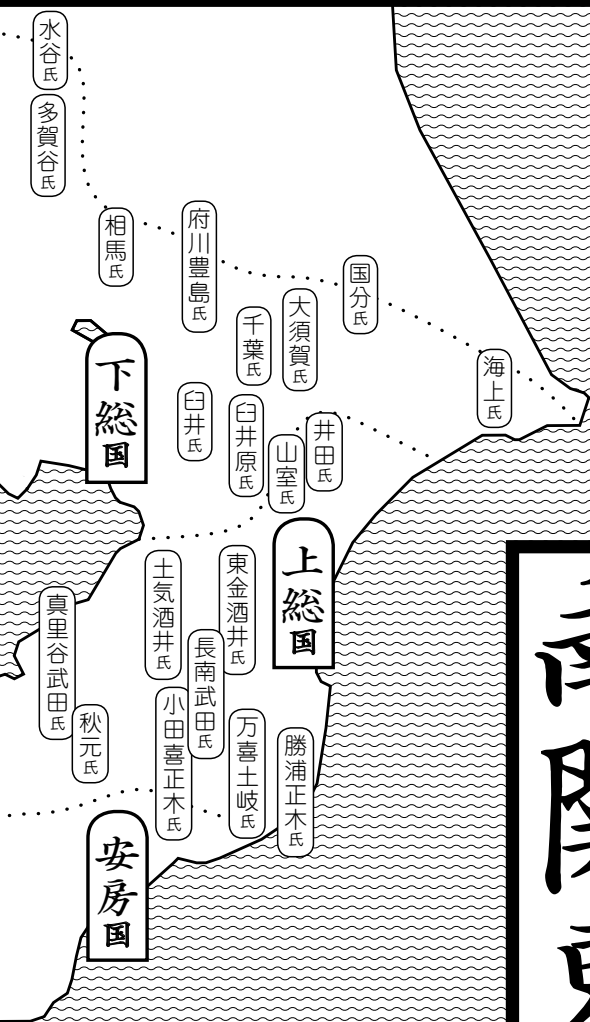
あとがき

●北原氏	445
●新納氏	448
●三田井氏	448
●米良氏	449
●加治木肝付氏	449
●肝付氏	450
●菱刈氏	451
●種子島氏	452
●祢寝氏	452
●本田氏	453
●樺山氏	453
●伊地知氏	454
●伊集院氏	454
●島津薩州家	455
●入来院氏	456
●伊作氏	457
●島津相州家	457
●祁答院氏	458
●東郷氏	458
●頼娃氏	459
●佐多氏	459
●川上氏	460
●喜入氏	460
〔語彙解説〕	459
コラム尚氏	466
和暦西暦対応表	468
参考文献	470
執筆者紹介	486
あとがき	494

第二章

地域担当者…柴裕之

# 南関東地域





山川氏

梁田氏

高城氏

騎西小田氏

木戸氏

成田氏

深谷上杉氏

藤田氏

上田氏

武蔵国

岩付太田氏

江戸太田氏

三田氏

大石氏

内藤氏

相模国

松田氏

玉縄北条氏

大森氏

三浦氏

内房正木氏

伊豆国

富永氏

清水氏

# 衆国・大名と乱

関東における戦国時代の始まりとなった享徳の乱は、室町時代までの鎌倉を中心とした政治・社会の枠組みを解体へと導いた。その内乱のなかで、下総国では伝統的な豪族である千葉氏、結城氏がそれぞれ家内部の政争を経つつ、また上総・安房両国では、古河公方足利氏へ従う武田氏・里見氏たちが入部して、地域の領主たちを従え領域権力化を果てしていく。一方、享徳の乱から長尾景春の乱を通じて、上野国と武蔵国北部を山内上杉氏、相模国と武蔵国南部を扇谷上杉氏が、それぞれ領国化を進める。また伊豆国は、堀越公方足利氏の管轄としてあった。

だが、この余波により、まず山内・扇谷両上杉氏では、長享の乱を惹起していく。また伊豆国では、明応の政変と連動して、伊勢宗瑞（北条早雲）が伊豆国へ侵攻して堀越公方家とそれに従う領主たちを没落させて領国化を遂げ、さらには山内・扇谷両上杉氏との敵対のもとで、相模国へ侵攻した。そして、これら一連の争乱のうえで、南関東の各国国衆が台頭する。

その後、北条氏は相模国衆をほぼ討滅した平定のうえで、山内・扇谷両上杉氏に従う各国衆たちを従属させていき、その領国を併吞していく。また安房国では、里見氏が天文の内訌を経て、庶流の義堯系統が重臣正木氏の支持のもとで台頭し、上総国では、真里谷武田氏の内乱に端を発して、北条・里見両氏の代理戦争が展開する。下総国では古河公方に対峙して小弓公方足利義明が房総諸氏の支持のもとに活動するが、天文七年の第一次国府台合戦により滅亡。北

# 南関東の戦国争

条氏は、古河公方との関係を強化のうえで、上野・下総・上総各国へと勢力を拡大していった。

この関東の政情に対し、北条氏へ対抗する大名・国衆の要請を受け、永禄三年九月に長尾景虎（上杉謙信）が関東へ侵攻する。この謙信の関東侵攻には、対北条勢力のみでなく北条氏へ従属した南関東の国衆たちも従うが、北条氏の反攻に再従属を余儀なくされるなどして、攻防は一進一退の展開を続けた。その後、永禄末年から元亀年間に北条氏と越後上杉氏は越相同盟を締結する。この事態に対し、やがて反北条方の常陸佐竹氏たち北関東大名・国衆や安房里見氏は、越後上杉氏から自立して独自の動向をおこなっていき、下総結城氏も加わる。

越相同盟はその後に破綻し、天正年間になると、北条氏は下総築田氏の関宿城（千葉県野田市）を攻略し、里見氏とは優位な政情のうえで和睦を締結、従属下にあった千葉氏には一族を家督に据えるなど、下総・上総両国へ領国を拡大した。里見氏は、この政情の中で家督相続や正木憲時による内乱の平定を経て、安房国と上総国南部を支配する大名の立場を維持した。

このような関東の政情下に、天下一統を目指す羽柴秀吉が戦闘行為の禁止とそれに伴う従属（惣無事）を求めるが、北条氏は造反することとなってしまう、小田原合戦へと至る。この結果、北条氏とそれに従った国衆たちは滅亡。そして残った結城・里見両氏は、関東へ入部した徳川氏とともに、豊臣政権下の大名として新たな展開を迎えていくこととなる。

## 成田氏

鎌倉御家人↓室・国人↓戦山内上杉氏古河公方・北条氏へ従属↓江下野  
 島山藩玉、改易

武蔵忍城（埼玉県行田市）の城主として知られる成田氏は、武蔵国成田郷（埼玉県熊谷市）を本拠に、鎌倉時代は鎌倉幕府の御家人として活動した。だが幕府滅亡の混乱のなかで没落し、安保氏の一族基員が成田氏を継承したとされる。

室町時代には、成田氏は鎌倉府下の国人としてあつたが、享徳の乱では山内上杉方に属し、この乱中に忍保へ進出し忍城を構築するとともに、周辺地域を統治下においた。その後長尾景春の乱では、古河公方足利成氏に従い活動するが、長享の乱では山内上杉氏へ属し、岩付城（埼玉県さいたま市）を構築する一方、本拠の忍城は古河公方足利政氏（成氏の子）の攻撃を受けている。

その後も山内上杉氏へ従属し続けながら、親泰の時には騎西小田氏に次男伊賀守（通称は助三郎）を養子に入れ、騎西城（埼玉県加須市）周辺地域をも勢力下に置いていく。そして天文年間に、北条氏の勢力が武蔵国中部に及ぶと、後継の長泰は北条氏へ従属する。

永禄三年九月に長尾景虎（上杉謙信）が関東へ侵攻を開始する

と、長泰は越後上杉氏へ従属し、北条氏の本城である相模小田原城（神奈川県小田原市）の攻撃に参戦する。だが長泰は、戦後に謙信との衝突から越後上杉氏を離叛し、北条氏へ再び従属する。このため謙信の攻撃を受け、永禄六年には長泰は降伏へと追い込まれ、家督を子氏長へ譲っている。

氏長は、その後も越後上杉氏へ従属し続けるが、永禄九年閏八月に北条氏の攻勢を前に、再び同氏へ従属する。そして氏長は以後も北条氏へ従属し続け、そのもとで武蔵国北部の大里・幡羅両郡や騎西郡北西部などを支配領域とする国衆へと発展していく。天正十八年に羽柴秀吉と北条氏の間で小田原合戦が起きると、氏長は小田原へ籠城し、忍城には叔父の泰季たちが守衛に勤めた。忍城攻略にあたった羽柴（豊臣）軍は、石田三成のもとで城周辺に堤防を築き水攻めをおこなうが、籠城方は抗戦を続け、七月十四日によくやく開城へと至っている。近年に脚光を浴びた映画「のぼうの城」は、この時のことを題材としたものである。戦後、氏長は一時蒲生氏郷に預けられたが、天正十九年に秀吉より下野国烏山（栃木県那須市）三万七〇〇〇石を与えられ、同地域の統治を任された。氏長死後に家督は弟泰親が継承したが、泰親の死去後、内紛により成田家は改易となった。

〔居城：忍城（埼玉県行田市） 菩提寺：龍淵寺（埼玉県熊谷市）〕

武蔵国（埼玉県神川町）

# 長井氏

紋明  
家不

戦…足利長尾氏家臣、北条氏・武田氏へ従  
属 ↓ 江…徳川氏へ仕え旗本

武蔵御嶽（埼玉県神川町）城主の長井政実（むさしのみたけ）は、はじめ平沢氏を称し、永禄三年に開始された長尾景虎（ながおの）（上杉謙信）の関東侵攻では、「関東幕注文」により、足利長尾氏の家臣として活動がみられる。その後、政実は北条氏へ従属し、御嶽城主として神流川東岸（かんながら）を支配した。元亀元年六月には甲斐武田氏の攻撃を受け従属し、姓を長井へと変えた。しかし、翌二年末に北条・武田両氏間で再び同盟が締結されると御嶽城は北条氏に接収され、政実は上野三ツ山城（群馬県藤岡市）へ移る。武田氏滅亡後、没落し、越後上杉氏のもとへ逃れた。後裔は徳川氏へ仕えた。

〔居城…御嶽城（埼玉県神川町）↓上野三ツ山城（群馬県藤岡市） 菩提寺…天陽寺（同市）〕

南関東

武蔵国（埼玉県深谷市）

# 深谷上杉氏

南室…庁鼻和上杉氏 ↓ 戦…山内上杉氏、北条氏、越後上杉氏へ従属 ↓ 江…水戸徳川家臣



深谷上杉氏は、武蔵国庁鼻和（埼玉県深谷市）を拠点に活動した上杉一族である。享徳の乱で、房憲が深谷（埼玉県深谷市）に築城し、やがて榛沢郡を支配する国衆となる。長享の乱が勃発すると、房憲の子憲清は山内上杉氏へ従った。憲清の子憲賢の時に、北条氏が北武蔵へ進出すると、同氏へ従属した。永禄三年九月に長尾景虎（ながおの）（上杉謙信）が関東へ侵攻を開始すると、憲賢の後継憲盛は越後上杉氏へ従属するが、その後も憲盛・氏憲父子は政情に従い北条・越後上杉両氏への従属を繰り返した。最終的に北条氏へ従属する国衆としてあり、北条氏滅亡後は、後裔が水戸徳川家へ仕えた。

〔居城…深谷城（埼玉県深谷市） 菩提寺…国濟寺（同市）〕

武蔵国（埼玉県羽生市）

# 木戸氏

戦…古河公方奉公衆、越後上杉氏へ従属



武蔵羽生城（埼玉県羽生市）の城主木戸氏は、広田一族の木戸範実の系譜にある。範実の長男直繁は広田姓を称し、次男忠朝ははじめ河田谷姓、永禄末年に木戸へ改姓した。直繁・忠朝兄弟は、古河公方に従い羽生城を居城に活動し、北条氏の勢力拡大に抗い、永禄三年九月に長尾景虎（ながおの）（上杉謙信）が関東へ侵攻すると、越後上杉氏へ従属した。その後、忠朝は武蔵皿尾城（埼玉県行田市）の城主を経て、羽生城主となる。だが、上杉・北条両氏間の越前同盟が破綻すると、羽生城は北条氏の攻撃を受け、天正二年閏十一月に落城。忠朝・重朝父子は、越後上杉氏に引き取られ、上野国で活動した。

〔居城…羽生城（埼玉県羽生市） 菩提寺…不明〕

# 騎西小田氏



戦：古河公方奉公衆、越後上杉氏へ従属

小田氏は、常陸小田氏の一族で、古河公方奉公衆であった。文亀年間には、大炊頭が武蔵騎西城(埼玉県加須市)の城主としてあり、武蔵忍城(埼玉県行田市)主の成田親泰の次男伊賀守(通称は助三郎)を養子に迎えた。家督を継承した伊賀守は、永禄三年九月に長尾景虎(上杉謙信)が関東へ侵攻を開始すると、兄の成田長泰とともに越後上杉氏へ従属する。だが翌年に長泰が謙信と対立すると、越後上杉氏へ敵対。この結果、謙信の攻撃を受け、永禄六年四月に越後上杉氏へ再従属する。子の大炊頭の際に小田家は断絶し、その支配領域(騎西領)は、成田氏の支配地域に組み込まれた。

〔居城：騎西城(埼玉県加須市) 菩提寺：雲祥寺(同市)〕

# 上田氏



室：扇谷上杉氏重臣 ↓ 戦：北条氏へ従属、松山城主として国衆化

上田氏は、室町時代より扇谷上杉氏为重臣としてあり、戦国時代前期に扇谷上杉氏の相模支配において守護代として活動した。永正六年に伊勢宗瑞(北条早雲)へ従い扇谷上杉氏に敵対、翌七年七月に居城の武蔵権現山城(神奈川県横浜市)を攻略され、その後没落した。

武蔵松山城(埼玉県吉見町)の城主として知られる上田氏は、その庶流である。天文十五年九月に松山城を北条氏より奪還した扇谷上杉方の武将太田資正は、その後松山城へ上田朝直を配置するが、朝直は直後に北条氏へ従属してしまう。これにより朝直は松山城主の立場を維持するが、同城には上田氏とは別に北条氏の軍勢である松山衆も配置され、その地域支配は限られたものであった。

永禄三年九月に長尾景虎(上杉謙信)が関東へ侵攻を開始すると、松山城は攻略され越後上杉方の占有となるが、その後北条氏が奪還し朝直が再び城主となる。そして永禄十二年から元亀年間における北条・上杉両氏間の越相同盟に伴う領土割譲問題のなかで、松山城に付属する吉見郡周辺地域(松山領)が朝直の領有となり、上田氏は北条氏従属下のもとで国衆へと発展していく。朝直の後、長男長則、次男憲定の二代にわたり松山領を支配するが、小田原合戦で羽柴(豊臣)方の前田利家たち軍勢の攻撃により松山城は落城し、相模小田原城(神奈川県小田原市)に籠城していた憲定も戦後は没落した。

〔居城：松山城(埼玉県吉見町) 菩提寺：浄蓮寺(埼玉県東秩父村)〕

# 岩付太田氏



室・扇谷上杉氏重臣 ↓ 戦・扇谷上杉氏・北条氏・越後上杉へ従属、北条氏への従属のもとで後継に太田源五郎（北条氏政次男）を迎えるが、源五郎が若死につき断絶

太田氏は、扇谷上杉氏に仕え、道真・道灌父子の時代には当主代行政務を担う家宰（執事）として活動した。特に道灌は、享徳の乱時には武蔵江戸城（東京都千代田区）を居城に活動し、また長尾景春の乱では景春方の諸将を平定したことで名高い。

岩付太田氏は、道灌の甥とされる資家の系統で、大永四年二月に資家の後継資頼が武蔵国へ侵攻した北条氏へ内応し、扇谷上杉方渋江氏の武蔵岩付城（埼玉県さいたま市）を奪取したことに始まる。その後、資家は扇谷上杉氏の反攻にあい、同氏へ従属を余儀なくされ一時岩付城を奪取されるが、享禄四年九月に奪還している。そして子資頭の際に再び北条氏へ従属し、岩付城に付属する足立郡周辺地域（岩付領）の領有を確保した。

その後、資頭には実子がなく死去後の天文十六年十二月、資頭とは不和で扇谷上杉氏に属し武蔵松山城（埼玉県吉見町）にあった弟の資正が岩付城を奪取し、家督を継承する。だが、その直後に北条氏康の反攻により武蔵松山城は落城、資正も北条氏への従属を余儀なくされる。これにより、資正は北条氏に従う「他国衆」として位置づけられた。永禄三年九月に長尾景虎（上杉謙信）

が関東へ侵攻を開始すると、越後上杉氏へ従属、北条氏とは再び敵対する。だが北条氏の攻勢が強まると、永禄七年七月に資正の子氏資は北条氏へ内応し、資正は岩付城より追われてしまう。

父資正を追い家督を継承した氏資は、北条氏の他国衆として活動するが、永禄十年八月の安房里見氏との上総三船山（千葉県富津市・君津市）合戦で戦死してしまふ。氏資が戦死し後継のない岩付太田家へ北条氏は、当主氏政の次男源五郎（幼名は国増丸）を家督に据え、岩付太田家を再興するが、天正十年七月に源五郎は若くして死去してしまう。これにより、岩付太田氏は断絶し、天正十一年に岩付領には北条氏房（北条氏政の三男、源五郎の弟）が入り支配をおこなっていくこととなる。

一方、資正は、次男の梶原政景とともに常陸佐竹氏の客将として、常陸片野城（茨城県石岡市）を居城に軍事・外交に活動する。だが資正は、岩付領の奪還を果たせず、小田原合戦後は佐竹氏の家臣としての立場を求められていき、天正十九年九月に死去した。梶原政景は、その後に結城秀康へ仕えた。

〔居城・岩付城（埼玉県さいたま市） 菩提寺・養竹院（埼玉県川島町）〕

# 藤田氏



室・国人↓戦・山内上杉氏・北条氏へ従属、後継に北条氏邦を迎え北条御一家衆

藤田氏は、武蔵井俣党の支流の出身とされる。長享の乱時には山内上杉氏に従い活動し、その後の業繁の時代には、武蔵花園城(埼玉県寄居町)を居城に、秩父郡を支配領域とする国衆へと台頭した。天文十五年九月の河越合戦後に、業繁の子泰邦は山内上杉氏から北条氏へと従属先を変え活動する。弘治元年に康邦が死去すると、嫡女大福御前の婿養子に、北条氏康の四男氏邦を迎える。氏邦は藤田当主として武蔵鉢形城(埼玉県寄居町)へ移り、さらに北条御一家衆(一門)としての立場を強め、北条へ復姓すると、藤田家はそのもとに包摂されていくことになる。

〔居城〕花園城(埼玉県寄居町) 菩提寺：正竜寺(同町)

# 三田氏



鎌・御家人↓室・国人↓戦・山内上杉氏・北条氏へ従属、北条氏を離叛し攻勢を受け滅亡

戦国時代初期に武蔵勝沼城(東京都青梅市)を居城に奥多摩地方で活動した三田氏は、鎌倉時代は御家人としてあつたようである。但し三田氏が、確かな史料で柚保(東京都青梅市)周辺を支配する領主として確認されるのは、応永二十年以降で、鎌倉府直属の国人としてあつた。

享徳の乱時は、古河公方足利成氏方にあつたようであるが、山内・扇谷両上杉氏の内戦である長享の乱が勃発すると、三田氏宗は山内上杉方に属し活動する。そしてこの内戦のなかで氏宗は、山内上杉氏に従属しつつ、本領の柚保のほか入東郡北部・高麗郡東部などの周辺地域を支配領域とした国衆へと発展した。また、氏宗・政定父子は連歌師の宗長と交流を持ち、連歌会や贈歌が行われている。

永正年間末に北条氏の勢力が武蔵国へ展開しだすと、政定は北条氏へ従属し、父氏宗以来の支配領域を保護された。北条氏への従属化のなかで、政定の嫡男は元服に際し、北条氏綱より偏諱を与えられ、実名「綱定」を名乗る。綱定は、弘治三年までには家督を継承して引き続き北条氏へ従属した「他国衆」としてあつたが、永禄三年九月に長尾景虎(上杉謙信)が関東へ侵攻を開始すると、綱定は北条氏から離叛し越後上杉方へ属してしまふ。この結果、翌四年六月より北条氏の攻勢を受け、綱定は居城を勝沼城から唐貝山城(東京都青梅市)に移し迎え撃つが、落城した。ここに三田氏は滅亡し、その支配領域・旧臣は、北条氏照へ継承される。

〔居城〕勝沼城(東京都青梅市) 菩提寺：海善寺(同市)



武蔵国（東京都千代田区）

# 江戸太田氏



室：扇谷上杉氏重臣 ↓ 戦：扇谷上杉氏・北条氏・里見氏へ従属 ↓ 江：徳川氏へ仕え譜代大名

江戸太田氏は、扇谷上杉氏の家宰太田道灌の直系である。道灌謀殺後、子資康は山内上杉氏へ属すが、後継資高は扇谷上杉氏へ再従属し、武蔵江戸城（東京都千代田区）に配置された。大永四年正月、資高は北条氏綱へ従属し、江戸城攻略に尽力する。資高の死後、子康資が家督を継ぎ、永禄二年作成の北条家所領 役帳では、江戸衆として一四〇〇貫文余の所領を所持した。だが康資は、その後安房里見氏へ従属し、翌七年正月の下総国国府台（千葉県市川市）での敗戦により上総国へ逃れ、正木憲時の乱で自害した。後裔は徳川氏に仕え、譜代大名となる。

〔居城：江戸城（東京都千代田区）菩提寺：本行寺（東京都荒川区）〕

南関東

武蔵国（東京都八王子市）

# 大石氏



室：山内上杉氏重臣・武蔵守護代 ↓ 戦：北条氏へ従属、後継に北条氏照を迎え北条御一家衆

大石氏は、出身は信濃国とされ、上杉氏の一派山内上杉氏へ仕え重臣となる。室町時代には、関東管領職にあった主家の山内上杉氏のもとでたびたび武蔵守護代を務めた。

享徳の乱では、主家の山内上杉氏に從い転戦するが、長尾景春の乱が起ると、惣領遠江守家が山内上杉頼定へ従う一方、下総葛西城（東京都葛飾区）を本拠とした石見守家は景春方へ属した。この時期、駿河守家の当主定重は、新座郡柏の城（埼玉県志木市）を本拠とし、城内の高楼建築の居館は長享元年に詩僧の万里集九に「万秀齋」と命名されている。

その後、定重の子道俊は、永正元年十二月に山内上杉氏が攻略した柵田城（東京都八王子市）に在城するが、同七年の伊

勢宗瑞（北条早雲）の攻勢に攻略され、道俊は由井城（東京都八王子市）へ移る。

以後、大石氏（駿河守家）は由井城を居城にして、多西郡南部を中心に周辺地域を支配する国衆として活動する。北条氏の勢力が武蔵国へ展開したすと、道俊の養嗣子憲重は北条氏へ従属し、北条氏綱より偏諱を与えられ、綱周と名を改めた。また綱周は北条氏から養嗣子の後継者に求めた結果、弘治二年に北条氏康の三男氏照が家督を継承する。その後、北条氏との繋がりのもと御一家衆（二門）としての活動が求められるなかで、氏照が名字を北条へ改めると、大石家はそのもとに包摂されていく。

〔居城：柏の城（埼玉県志木市）↓由井城（東京都八王子市）菩提寺：不明〕

## 三浦氏



鎌・御家人↓室・相模守護↓戦・扇谷上杉氏へ従属、伊勢宗瑞（北条早雲）の攻略により滅亡

三浦氏は、源頼朝を支え、鎌倉幕府の創設に尽力した有力御家人として知られる。しかし泰村の時、宝治元年に起きた合戦（宝治合戦）で北条時頼と戦い、三浦本家は滅亡した。

この時、三浦一族の佐原盛時は三浦本家と行動をとともにせず北条時頼に与し、以後は北条得宗家（時頼の後裔）との関係を強めて活動していく。鎌倉幕府滅亡時、当主の時継は後醍醐天皇方に属し活動しようだが、建武二年の北条高時遺児の時行による中先代の乱では、時行方に属してしまふ。この後の足利尊氏方の反攻により時継は滅亡するが、時継の子高継は足利方に属して継続し、その後も三浦氏は足利氏のもとで功績を挙げ、相模守護職を獲得して鎌倉府下で活動する。だが時高の時に、相模守護職を狙う鎌倉公方足利持氏により三浦氏は相模守護職を剝奪されてしまふ。この結果、時高は室町幕府・関東管領上杉氏と持氏による対立の永享の乱やその後の結城合戦時には鎌倉公方方には従わず、上杉方としてあつた。

この永享の乱・結城合戦を契機に、時高はその後に相模守護となつた扇谷上杉氏との関係を深め、享徳の乱では扇谷上杉氏

のもとで相模国三浦郡を拠点に活動する。この後時高は、扇谷上杉氏と堀越公方足利政知の政争に巻き込まれ隠遁し、扇谷上杉氏から養子に迎えた道含（実名は高教とされる）が家督を継ぐ。高教は長尾景春の乱時に、扇谷上杉氏家宰（当主代行を務める家臣の代表者）の太田道灌との関係を深めて活動。この結果、道灌が殺害され長享の乱が起きると、道含・道寸（実名は義同とされる）父子は山内上杉氏へ従属してしまふ。その後、道寸は再び扇谷上杉氏への従属を余儀なくされるが、そのなかで三浦郡内の武士たちを従わせ、同郡を支配する国衆へと台頭していく。

だが永正年間になると、伊豆国と相模国西部を押さえた伊勢宗瑞（北条早雲）が山内・扇谷両上杉氏と対立し、扇谷上杉氏に味方する相模東部・中部地域へ攻勢を仕掛ける。その伊勢勢の攻勢に、義同（道寸）も次第に守勢に追い詰められる。

そして最終的には、道寸・義意父子は居城の三崎城（神奈川県三浦市）で伊勢勢を迎え撃つ。だが、永正十三年七月に伊勢（北条）勢の攻撃に屈し、道寸・義意父子は自害のうえ三崎城は落城、三浦氏は滅亡した。

〔居城：三崎城（神奈川県三浦市） 菩提寺：本瑞寺（同市）〕

# 玉縄北条氏



戦・北条氏御一家集 ↓ 江・徳川氏へ従い  
譜代大名

玉縄北条氏は、相模玉縄城（神奈川県鎌倉市）を居城に相模国東部（東郡）を中心とする地域支配に携わった北条御一家衆（一門）である。伊勢宗瑞（北条早雲）の子北条氏時が、享禄二年に兄氏綱により敵対する扇谷上杉氏へ対する押さえとして玉縄城に配置されたことに始まる。氏時死後は、氏綱の三男為昌が家督を継承し、相模国三浦郡や武蔵国小机（神奈川県横浜市）地域にもおよぶ領域を支配した。

為昌が子息なく死去すると、駿河今川氏の重臣福島氏の出身、氏綱の娘婿として北条一門にあり、既に為昌のもとで玉縄城代（城主の代行者）を務めていた綱成が城主となる。綱成は、為昌の遺領相模国東郡・武蔵国久良岐郡の支配に携わり、永禄二年作成の北条家所領役帳によると、一三七〇貫文余の知行地などを領有した。その一方で、綱成は北関東・南奥の大名・国衆との外交交渉を担当し、また北条領国の最前線地域の防備に活動した。

綱成は元亀三年に北条氏康の死去を受け隠居し（綱成の死去は天正十五年五月で、その間も出家の身ながら最前線地域の防備に従事す

る）、嫡男で北条氏康の娘婿であった康成が家督を継承。家督継承に際して、康成は当主氏政より氏の一字を与えられ、氏繁へ改名した。この氏繁への改名により、綱成系統の玉縄北条氏が北条氏御一家衆としての立場をより強めることとなった。氏繁も父綱成と同様に、玉縄城主だけでなく、常陸飯沼城（茨城県坂東市）の城代を務めるなど北関東方面の守衛・統治に携わった。天正六年六月に氏繁が死去すると、家督は氏舜が継ぐ。だが同八年になると、氏舜の活動は見られなくなり、代わってその弟氏勝が玉縄北条家当主として活動する。天正十八年の小田原合戦では、氏勝は伊豆山中城（静岡県三島市）の守衛にあたるが、羽柴（豊臣）勢の攻勢に同城を追われ、玉縄城へ帰還する。その後四月に、氏勝は羽柴（豊臣）勢の攻勢により降伏し、羽柴秀吉の助命認可のうえで、徳川家康へ従うこととなった。

徳川氏の関東移封後は、氏勝は下総岩富城（千葉県佐倉市）一万石を領有した。後継氏重（保科正直の四男で養子）は譜代大名として、最後は遠江国掛川（静岡県掛川市）藩主となるが、子息なく断絶した。

〔居城・玉縄城（神奈川県鎌倉市） 菩提寺・龍王寺（同市）〕

## 大森氏



室：駿河国駿東郡の国人↓戦：扇谷上杉氏、山内上杉氏へ従属

大森氏は、駿河国駿東郡大森(静岡県裾野市)を拠点とする国人であったが、鎌倉公方との関係を強め、頼春の時に相模国西部へと進出していった。

享徳の乱が勃発すると、頼春の子憲頼は古河公方足利成氏方に属すが、憲頼の弟氏頼・実頼父子は室町幕府・上杉氏に味方し対立した。そして長尾景春の乱時に、扇谷上杉氏家宰(執事)の太田道灌の尽力を得て、氏頼・実頼父子が憲頼の後裔を追う。これにより、氏頼は相模小田原城(神奈川県小田原市)を居城に同国西部地域を支配する国衆化を果たす一方、長享の乱では扇谷上杉氏へ属し活動した。

氏頼の後継式部少輔(式部大輔ともみられる)は、伊勢宗瑞(北条早雲)とともに扇谷上杉方として活動したが、山内上杉方の攻勢に同氏へ従属する。この結果、宗瑞の攻撃を受け、小田原城より追われた。

(居城：小田原城(神奈川県小田原市) 菩提寺：乗光寺(静岡県小山町))

## 松田氏



鎌：御家人↓南：室：国人↓戦：山内上杉氏、北条氏へ従属、北条氏の家臣化

松田氏は、藤原秀郷流波多野氏の一族出身とされ、相模国松田郷(神奈川県松田町)を本拠に活動した。鎌倉時代中期に、備前国へ西遷した一族がいる。室町時代は鎌倉府直属の国人としてあったと思われ、享徳の乱時には頼秀が古河公方足利成氏方として活動しており、敵対する堀越公方足利政知は所領を没収している。その後、頼秀は山内上杉氏へ従属する。伊勢宗瑞(北条早雲)が相模国へ侵攻すると、北条氏へ従属する。

その後、小田原城(神奈川県小田原市)に属す相模国西部郡が北条氏の直轄地域に編成された。それに伴い、家臣としての立場を強め、永禄二年作成の北条家所領役帳では、頼秀の後裔と思われる康隆は小田原衆として同郡内で二八九貫六五〇文を所領としている。

なお、北条氏の重臣松田盛秀・憲秀の系統は、伊勢宗瑞とともに行動した備前松田氏の出身である。

(居城：松田城(神奈川県松田町) 菩提寺：不明)

相模国（神奈川県相模原市）

# 内藤氏

紋明  
家不

戦：扇谷上杉氏・北条氏へ従属、北条氏の家臣化

内藤氏は、扇谷上杉氏の重臣で、相模津久井城（神奈川県相模原市）の城主としてあった。大永年間の大和入道の時代に、北条氏へ従属した。

その後、後継朝行は、奥三保周辺地域よりなる津久井領を支配しつつ、北条氏への従属を強めた。そして次代康行の時には、永祿二年作成の北条家所領役帳では、津久井領内の被官・同心（津久井衆）を率い、一〇〇二貫文余の知行高を所持する存在に あった。

康行の後継には、一族より綱秀が養子として迎えられ、天正八年閏三月には当主として活動している。綱秀は、天正十四年正月までには家督を嫡男直行へ譲り、同十八年の小田原合戦では津久井城に籠城し、羽柴（豊臣）勢と戦う。一方、直行は小田原城に籠城し、合戦後は加賀前田氏へ仕えたとされる。

（居城：津久井城（神奈川県相模原市） 菩提寺：功雲寺（同市））

南関東

伊豆国（静岡県南伊豆町）

# 清水氏

紋明  
家不

戦：北条氏重臣、加納城主・伊豆郡代・清水城将 ↓ 江：越前松平家家臣

清水氏は、伊勢宗瑞（北条早雲）の伊豆侵攻以前より、宗瑞に従った譜代家臣とされる。

伊豆国では、永祿二年作成の北条家所領役帳によると、加納（静岡県南伊豆町）を中心に八二九貫余の所領を所持した。また、綱吉の時代より、伊豆国で国役（公事）の賦課・徴収にあたる郡代や三島（静岡県三島市）の代官を務めてきた。

綱吉の子康英は、父同様に伊豆郡代を務めるとともに、評定衆としても活動した。天正十六年、北条氏が下田城（静岡県下田市）を築城すると、康英は城兵を率いる城将を任され、小田原合戦時には同城の守衛にあたった。康英は戦後、河津三養院（静岡県河津町）に隠棲するが、子太郎左衛門尉は結城秀康へ仕えた。

（居城：加納城（静岡県南伊豆町） 菩提寺：三養院（静岡県河津町））

# 富永氏

とみなが

家不  
紋明

戦：北条氏に従い家臣化、江戸城将↓  
江：旗本

伊豆国西土肥（静岡眞伊豆市）を拠点とした富永氏は、伊勢宗瑞（北条早雲）が伊豆国へ侵攻すると、三郎左衛門尉が従い家臣となった。

北条氏が武蔵江戸城（東京都千代田区）を攻略すると、後継の正辰は同城本城番として配置された。その子康景は、永祿二年作成の北条家所領役帳によると、江戸衆として、伊豆国西土肥をはじめ相模・武蔵両国で二二三貫七三〇文の所領を所持した。康景は、同七年正月の下総国府台合戦で戦死し、その家督を政家が継ぎ、引き続き江戸城本城番を務める一方で、西土肥を支配した。小田原合戦後は、政家の嫡男直則が徳川氏へ仕え、後裔は旗本となる。

〔居城：高谷城（静岡県伊豆市） 菩提寺：清雲寺（同市）〕

# 井田氏

いだ



戦：千葉氏直臣、北条氏他国衆↓江：水戸徳川家家臣

上総国大台城（千葉県芝山町）および坂田城（千葉県横芝光町）を本拠にした国衆。戦国時代の家督は、美濃守某一刑部大輔某一美濃守（鷹光か）―因幡守某と継承された。

井田氏は千葉氏の直臣衆であったが、永祿十年とされる九月十二日付北条氏政書状（井田文書）でこれまでと変わらず入魂することを求められており、これより以前から北条氏の他国衆でもあった。小田原合戦では一五〇騎を動員（毛利家文書）、井田氏自身は小田原城に籠城した。合戦後、井田氏は徳川家康の子武田信吉に仕え、以後は水戸徳川家臣としてあった。

〔居城：大台城（芝山町）、坂田城（横芝光町） 菩提寺：光台寺（同町）〕

# 万喜土岐氏

まんぎと



戦：北条氏に従属

上総国万喜城（千葉県いすみ市）を本拠にした国衆。戦国期には、為頼（法名慶含院殿海雄厳心居士）と義成がみえ、両者は親子であった（上総国諸侯大夫過去帳）。

万喜城をめぐる攻防としては、天正三年の北条氏による房総侵攻があり、万喜城は北条方の最前線の城として、一万俵の兵糧が搬入されている（由良文書）。同年、土岐氏は小田喜正木憲時とも争いを起こした（上野家文書）。

小田原合戦では北条氏に味方し、万喜城の他に鶴ヶ城・「へひうか城」を拠点として、一五〇〇騎を動員した（毛利家文書）。同合戦での北条氏の滅亡によって、土岐氏も没落した。

〔居城：万喜城（いすみ市） 菩提寺：海雄寺（同市）〕

## 真里谷武田氏



室：鎌倉府奉公衆 ↓ 戦：北条氏(他国衆)・里見氏に従属

享徳の乱の際、武田信長(甲斐国守護武田信満の次男で鎌倉府奉公衆)が上総に入部した。武田信長の子清嗣は、享徳の乱以前から上総国真里谷郷(千葉県木更津市)に居住していた武田一族の家督を継承、その本拠に支配拠点を構築した。真里谷武田氏の成立である。家督は清嗣の後、信嗣―信清―大夫―信隆―信広と継承された。真里谷武田氏は里見氏と婚姻関係を結ぶなど、関係を密接にしていたが、享祿年間の古河公方足利高基・晴氏父子の争いの際、敵対している。

天文三年七月に信清が、同年十一月に信清嫡子大夫が相次いで死去したことにより、一族間での内紛が生じた。とくに信隆の叔父で佐貫城主(千葉県富津市)信秋との抗争が激しく、信隆は一時真里谷城を奪われてしまう。その後、北条氏の支援を受け、信隆は真里谷武田氏当主の座に復帰、この段階で真里谷武田氏は北条氏に従属する他国衆となった。しかし、一族間の内紛は治まらず、天文二十一年の信広死去時、後継者がいなかったため、真里谷武田氏は断絶した。

(居城：真里谷城(木更津市) 菩提寺：真如寺(同市))

## 長南武田氏



戦：北条氏(他国衆)・里見氏に従属

真里谷武田信嗣の子で「長南城之開基」(武田家過去帳)という武田宗信が上総国長南(千葉県長南町)に進出し、成立したとされる一族。本拠は長南城。史料上、確実にみえるのは武田豊信という人物で、天文二十年から天正十八年の滅亡まで当主であった。

長南武田氏は、北条・里見氏の間で従属と離反を繰り返しながら、上総国長南郡を中心に、佐是郡池和田城(千葉県市原市)、長北郡藻原庄(千葉県茂原市)、伊南庄古沢(千葉県いすみ市)にわたる領国を形成した。里見氏および小田喜正木氏とは、婚姻関係も結んでいる。

天正五年の北条氏による里見攻めの際、北条一族氏規の取り成しで、北条氏に従属(甲申文書)、以後は北条氏の他国衆となった。ただし、このとき北条氏と里見氏の和睦(房相一和)が結ばれていたため、里見氏との関係も良好であった。小田原合戦では北条氏に従い、長南城・池和田城・勝海城を拠点に一五〇騎を動員(毛利家文書)。同合戦における北条氏の滅亡によって、長南武田氏も滅亡した。

(居城：長南城(長南町) 菩提寺：大林寺(同町))

## 東金酒井氏



戦：原氏・里見氏・北条氏(他国衆)に従属  
↓江：徳川家臣

上総国東金城(千葉県東金市)を本拠にした国衆。その始祖は酒井清伝とされるが、確証は得られていない。戦国時代の家督は、隆敏―某―胤敏―政辰と継承された。

東金酒井氏は白井原氏に従属していたが、永祿二年成立とされる『小田原衆所領役帳』に他国衆としてみえることから、この頃までには原氏から自立、北条氏に個別的に従う存在になっていた。ただし、生き残りをはかるため、北条氏と敵対する里見氏との間で従属・離反を繰り返した。

東金酒井氏の当主である酒井政辰は、上総国勝浦正木頼忠の妹を妻としており、国衆同士で婚姻関係が結ばれていた。

小田原合戦の際には、北条氏に従って一五〇騎を動員(毛利家文書)、政辰自身は小田原城に籠城した。その際、政辰は東金留守衆の鶴沢氏へ浜野(千葉県千葉市中央区)から船で兵糧を搬送するよう命じており(鶴澤文書)、水上交通にも長けていた。小田原合戦の結果、東金酒井氏は没落したが、政辰の嫡子政成は徳川氏に仕え、存続がなされた。

〔居城：東金城(東金市) 菩提寺：本漸寺(同市)〕

## 土気酒井氏



戦：原氏・里見氏・北条氏(他国衆)に従属  
↓江：徳川家臣(旗本)

上総国土気城(千葉県千葉市緑区)を本拠にした国衆。その始祖は酒井清伝とされるが、確証は得られていない。戦国時代の家督は、隆賢―某―胤治―政茂―康治と継承された。当主のうち、政茂の「政」の字は、小田原北条氏当主氏政からの偏諱である。

土気酒井氏は、白井原氏に従属していたが、やがて小弓公方のもとへ離反するなど独自の動きをするようになり、永祿二年成立の『小田原衆所領役帳』では北条氏の他国衆であることが確認される。土気酒井氏は自らの存続のため、北条氏と里見氏の間で離反・従属を繰り返したが、北条氏による侵攻を受け、天正四年からは北条氏に従属し続けた。天正十四年に人質を船で北条氏へ送り届けていることは、土気酒井氏の忠節を示す行動として注目される(鳥海文書)。

小田原合戦では北条氏に従い、三〇〇騎を動員している(毛利家文書)。小田原合戦の結果、土気酒井氏は没落するが、当時の当主左衛門佐(重治)は徳川氏に仕え、旗本として存続した。

〔居城：土気城(千葉市緑区) 菩提寺：善勝寺(同区)〕



## 勝浦正木氏



戦…里見氏・北条氏（他国衆）に従属↓  
江…徳川家家臣（旗本）

上総国勝浦城（千葉県勝浦市）に拠った国衆。本宗家小田喜正木氏の分家にあたる系統で、戦国期の家督は時忠―時通―頼忠と継承され、代々官途左近大夫（将監）を名乗った。勝浦正木氏は里見氏に従属しつつ、上総国でも指折りの湊町勝浦湊をおさえながら、領域支配を展開した地域権力であった。また、常陸佐竹氏と里見氏の取次を務めるなど外交面でも活躍した。

しかし、永祿七年の国府台合戦における里見氏の敗北を契機に、里見氏から離反、北条氏の味方になった。

その際、従属の証として北条氏へ人質に出されたのが頼忠であった。ここで里見氏は有力な味方を失うことになったわけで、勝浦正木氏の行動は「逆心」といわれた。（反町英作氏所蔵文書）

勝浦正木氏は北条氏の他国衆となったため、里見氏からの攻撃を受けた。その際支援を受けられなかったことから北条氏を見限り、再び里見氏に従うようになった。北条氏の味方



勝浦城趾の遠景。（勝浦市教育委員会）

をしていたのは、永祿十二年三月頃までであった。

その後、天正三年に時通が、翌年には時忠が相次いで死去したことや天正五年に「房相一和」が結ばれたことがきっかけで、北条氏へ人質として出されていた頼忠が勝浦に帰還、当主の座についた。頼忠は小田原合戦まで勝浦の支配をしていたが、徳川家康の関東入部による勝浦領没収という事態を受け、安房の里見氏のもとへ身を寄せざるを得なくなった。ただ、不遇なことばかりでもなかった。頼忠の娘お万の方（養珠院）が徳川家康の側室として召出され、紀伊徳川頼宣と水戸徳川頼房の母となった。

慶長十九年の里見氏の国替後、頼忠は家康の側室の父という立場および、頼忠次男で徳川頼宣に仕えた三浦為春の縁故によって、和歌山に移住、ここで生涯を過ごした。

頼忠の子息では、お万の方の縁で徳川家康に仕えた四男康長がいる。康長は最終的に武蔵国埼玉郡内知行七〇〇石を与えられ、康長の系統は以後旗本として徳川氏に仕え続けた。

〔居城…勝浦城（勝浦市） 菩提寺…日蓮寺（南房総市）〕

# 小田喜正木氏



戦…里見氏に従属(のちに一門衆) ↓ 江…  
徳川家に仕える

上総国小田喜城(千葉県夷隅郡大多喜町)を本拠にした国衆。戦国期の正木氏初代通綱(みちつな)の次男時茂(ときしげ)から信茂(のぶしげ)―憲時(のりとき)―時茂と家督が継承された。正木氏のなかでは本家筋にあたる。歴代のなかで初代時茂の活躍は目覚ましく、「日本に国持人つかひの上手よき手本」として、武田信玄・三好長慶・上杉謙信・毛利元就・織田信長と並んで、その名がみえる(朝倉宗滴話記)。

小田喜正木氏は、里見氏に従属した有力な国衆で、越後上杉氏をはじめ、甲斐武田氏・常陸佐竹氏と里見氏を取り次ぐ外交関係でも活躍した。

このように里見氏の重要な味方であったが、里見氏権力を揺るがす事件が起こった。天正八年六月晦日に火ぶたが切つて落とされた正木憲時の乱である。

天正六年五月の里見氏当主義弘の死去を契機に、義頼と梅丸の間で次期当主の座を争う内乱が勃発した。その結果、争いに勝利した義頼が当主の座についた。憲時はこうした里見氏権力のパワーバランスが崩れたことをきっかけに自立化をはかったように、ついには謀反を起こした。乱は、里見氏に常に先手

を打たれるかたちで進み、天正九年九月に小田喜城が落ち、憲時は自害した。憲時の乱後、里見義頼は次男に小田喜正木氏の家督を継承させた。これが二代目の時茂である。ここで、里見氏の御一門衆となった。

里見氏は慶長十九年伯耆国へ国替となるが、このとき時茂は駿府にいたようで、駿府から里見氏の国替先に向かった。しかし、間もなく駿府に呼び戻され、徳川家康死後は秀忠の命で江戸に召喚された。さらにその後、因幡国を治めていた池田光政(みつまさ)の預かりとなり、寛永七年に病没したといわれている。

小田喜正木氏の領域支配の面では、印文「時茂」で獅子の模様のある朱印状を使ったことが特徴である。この印判を使用したのは憲時であったが、初代時茂の影響力が強かったことを物語る。その他、小田喜正木氏は禅宗に深く帰依していたようで、東長寺・長安寺(ともに大多喜町)に法衣を寄進している。

(居城…小田喜城(大多喜町) 菩提寺…東長寺(同町))

上総国（千葉県君津市）

# 秋元氏



戦：北条氏・里見氏に従属

上総国小糸城（千葉県君津市）を本拠にした国衆。

天文二十三年の清和市場諏訪神社棟札銘には、大檀那を務めた本宗家当主秋元義政と釜滝（君津市）を本拠にする庶家刑部少輔政次がみえる。

二年後の弘治二年の同社棟札銘では、大檀那を秋元政次が務めている。この背景には、小田原北条氏の支援を受けた庶家釜滝系秋元氏による本宗家篡奪があるという（川辺氏旧記など）。

政次の後、義次―義則と家督が継承されるが、この頃になると「里見」を名乗っている（毛利家文書）。

政次の時期、里見方となり、里見氏から養子を迎え入れたことが関係しているという。その後の動向は定かではない。

〔居城：小糸城（君津市） 菩提寺：妙喜寺（同市）〕

南関東

上総国（千葉県芝山町）

# 山室氏



戦：上杉氏・北条氏（他国衆）に従属

上総国飯櫃城（千葉県芝山町）を本拠にした国衆。

戦国期の家督は、常隆―氏勝―宮内少輔（朝保か）―孫四郎と継承された（山室譜伝記、加茂譜醫院蔵虚空菩薩立像胎内銘、静嘉堂文库本南行雜録五など）。家紋は菱木瓜の勾裾濃（上杉家文書）。

永禄三年、上杉謙信の関東侵攻の際、上杉に味方したが、天正期には北条氏に従っており、北条氏政から山室宮内少輔（朝保か）へ子息の孫四郎の小田原在府が長いので、休息のため弟の孫三郎を交替要員とする申し出を了承した書状が出されている（下総文書）。

小田原合戦後は、上総国菱田村殿部田（芝山町）に居したともいう（山室譜伝記）。

〔居城：飯櫃城（芝山町） 菩提寺：不明〕



山室氏の本拠飯櫃城址。  
（撮影：石渡洋平）

# 内房正木氏



戦：北条氏（他国衆）・里見氏に從属↓  
江：内藤家に仕える（淡路守家）

内房地域に勢力を持っていた正木氏で、上総百首城（千葉県富津市）を本拠にした淡路守家と安房勝山城（千葉県鋸南町）を本拠にした安芸守家の両家を指す。

内房正木氏の初見は、天文十六年の正木弥五郎である。この正木弥五郎は、天文二十二年四月から開始された北条氏の上総・安房への本格的な侵攻において、北条氏に從属して活躍した。特に、天文二十三年・二十四年頃の天神山城（もしくは峰上城、両城とも富津市）の在城衆編成や里見方の上総国金谷城（富津市）攻撃などで重要な役割を果たしている（北条文書・上総国古文書）。弘治二年には弥五郎とともに後に百首城主としてみえる源七郎が連名で北条氏から文書を出されている（静嘉堂文庫集古文書）。永禄二年成立の『小田原衆所領役帳』には、他国衆として正木兵部大輔がみえる。この兵部大輔はここまで出てきた弥五郎と同人物ともいわれている。兵部大輔は内房に拠点を持ちながらも北条氏から三浦郡内でも知行を与えられている。その所領には公郷・浦賀・久里浜・金田など内房地域とも深い関係にある湊があることから、水上交通にも力を及ぼしていたといえる。

このように北条氏の他国衆として大きな力を有していたが、永禄四年には里見方としてみえるので（上杉家文書）、北条氏から離反したとわかる。以後は、里見氏に從属し続けた。

天正期に入ると、百首城主で淡路守を称した正木時盛とその跡を継いだ頼時、勝山城主で安芸守を称した輝綱が確認できる。この両家は、とくに天正十年代には、里見氏当主義康を支える有力な家として存在したようである（神野寺蔵棟札）。

小田原合戦後も里見氏に仕え、慶長期の記録類でも両家の存在が確認できる。淡路守家は、頼時の跡を里見義康から一字を拝領した康盛が継いだ。康盛は里見氏御一門衆の立場になったものの、慶長十九年の里見氏国替後は、内藤家に仕えた。内藤家長の娘は、康盛に嫁いでいる。康盛の子時盛（曾祖父の名を襲名）は、内藤家長の子政長に仕え、組頭八〇〇石の知行を持った。安芸守家の輝綱は、慶長九年九月十九日に死去（里見家過去帳）。この系統のその後は定かではない。

〔居城：百首城（富津市）・勝山城（鋸南町） 菩提寺：不明〕

## 多賀谷氏



室…結城氏に仕える ↓ 戦…結城氏・佐竹氏に從属 ↓ 江…与力大名

武蔵国埼玉郡騎西庄多賀谷郷（埼玉県加須市）を發祥とし、下総国下妻城（茨城県下妻市）を本拠にした国衆。戦国時代の家督は朝經—基泰—光經—朝經—政經—重經と繼承された。多賀谷氏は基泰の頃、周辺勢力を屈服させたことで支配領域を形成した。

その後、光經は結城氏や山川氏といった勢力と抗争を繰り返したが、光經の跡を継いだ朝經の頃、結城氏に人質を提出、結城氏に從属した。政經の頃には常陸佐竹氏とも連携し、常陸小田氏を攻めている。佐竹氏との関係は重經の頃になるとさらに強まり、結城氏と佐竹氏の両氏に從属するような立場になった。重經の代では、外交活動も活発となり、織田信長、羽柴秀吉、徳川家康とも関係を持っていた。羽柴秀吉の天下統一後、結城氏と佐竹氏に兩属していた立場故、家が分割された。本家は、佐竹義宣四男宣家が家督を繼承し、佐竹氏の与力大名として存在することになった。一方、重經の子三經は太田城（茨城県八千代町）を本拠に、結城秀康の与力大名となった。三經は結城秀康の越前転封にも従い、この越前で没した。

〔居城…下妻城（下妻市） 菩提寺…多宝院（同市）〕

## 白井原氏



室…千葉氏家臣 ↓ 戦…千葉氏（家宰）・北条氏（他国衆）に從属 ↓ 江…徳川家家臣

戦国時代の原氏は本拠を度々移動したが、最終的に白井城（千葉県佐倉市）を本拠にした。戦国時代の原氏は、南北朝期の千葉氏当主氏胤庶子胤高にはじまる系統である。家督は、胤房—胤隆—胤清—胤貞—胤榮—吉丸（胤信）と繼承された。

原氏はもともと小弓を本拠にしていたが、天文十五年の白井氏の滅亡を契機として、白井城に入部、白井氏家中を「白井衆」として把握するなど、この時期勢力を拡大させた。

原氏は千葉氏の家宰（家中の長）という立場にありながらも、独自の領域支配を展開し、北条氏の他国衆にもなっていた（小田原衆所領役帳）。原氏の本拠である白井は水陸交通の要衝であり、「屋形」千葉氏に匹敵する実力を持ち合わせ、天正十八年の小田原合戦では、三〇〇〇騎の千葉氏に次ぐ二五〇〇騎（二〇〇〇騎とも）の軍勢を動員した（毛利家文書）。同合戦では北条氏に從い、原氏も没落するが、原吉丸は家康に仕え、存続を果たす。領域支配では、印文「大吉宝久」「栄」の朱印の使用が特徴である。

〔居城…白井城（佐倉市） 菩提寺…宗徳寺（同市）〕

# 大須賀氏

鎌…地頭↓空…国人↓戦…千葉氏・北

条氏(他国衆)に従属

香取郡大須賀保を中心に、神崎庄・大戸庄の一部を支配した国衆。鎌倉期以来、大須賀保の在地領主であった。戦国期には、松子城(千葉県成田市)を本拠にした本宗家尾張守家と助崎城(成田市)を本拠にした信濃守家がいた。両者はそれぞれ別個の勢力として存在した。尾張守家については、隣接する国衆矢作国分氏と姻戚関係を結んでいた。

大須賀氏は本宗家・庶家ともに北条氏の他国衆として活躍した(佐野家所蔵文書)。小田原合戦では、北条氏に従ったが、戦いに敗れ没落した。江戸時代以降の動向は分かっていない。

(居城・松子城・助崎城(成田市) 菩提寺…宝応寺(同市))

# 海上氏

鎌…在地領主↓空…鎌倉府奉公衆↓

戦…千葉氏家中

下総国海上郡中島城(千葉県銚子市)を本拠にした国衆。戦国期の家督は、助秀(のりひで)―孝秀(もちひで)―持秀(もちひで)―持繁(はるしげ)―治繁(はるしげ)と継承された。この惣領家のほか、森山城(千葉県香取市)を本拠にした庶家もいた。両系統とも下総千葉氏の家中。中島海上氏は円福寺(銚子市)・門前市の発展、常世田常(じょうじょう)寺(銚子市)の造営など領内の寺院の保護に努めた。中島海上氏の領域支配は、天文期以降みえない。代わりに森山海上氏が、千葉氏によって香取郡支配の支城とされた森山城の城将として活躍した。小田原合戦では千葉氏に味方して没落したと思われ、その後の動向は不明。

(居城・中島城(銚子市)・森山城(香取市) 菩提寺…淨国寺(銚子市))

# 山川氏

鎌…御家人↓空…独立的な結城一族↓

戦…結城氏に従属↓江…結城秀康に仕える

下総国山川城(茨城県結城市)を本拠にした国衆。鎌倉御家人として活躍、南北朝・室町期は結城氏の庶家ながら独自性の高い立場にあった。戦国期は当初結城氏との対立もあったが、基本的に一貫して結城氏に従属した。戦国期の家督は景貞(かげさだ)―朝貞(あささだ)―政貞(まささだ)―直貞(なおさだ)―氏重(うじしげ)―晴重(はるしげ)と継承された。山川氏は小田原合戦において、羽柴秀吉のもとに参陣、所領の存続に成功した。その後、徳川家康次男で結城氏の家督を継承した秀康の越前転封に伴い、山川氏も付き従った。転封先での山川氏の石高は一万七〇〇〇石であった。

山川氏は代々曹洞宗に帰依したことも知られている。

(居城・山川城(結城市) 菩提寺…長徳院(同市))

# 国分氏



千葉常胤五男胤通を祖とし、香取郡大戸庄を中心に領域支配を行なった鎌倉期

以来の在地領主であり、下総国香取郡の矢作城（大崎城・千葉県香取市）を本拠にした国衆。

戦国期の惣領家の家督は之胤―胤盛―胤景―朝胤―勝盛―胤憲―胤政と継承された。千葉氏の家中で、のちに北条氏の他国衆となる。

領域支配では、下総国一宮の香取神宮の保護もしていた（旧大禰宜家文書）。しかし、永祿三年からの小田喜・勝浦両正木氏の香取郡侵攻・占領のなかで香取社との関係が薄れ、以後は千葉氏が実質的な保護を行うことになった。

永祿期後半には惣領家の他、兵部大輔を名乗る庶流の国分氏も台頭、北条氏の

他国衆として活躍した（歴代古案五）。

この系統は兵部大輔某―左衛門太郎某―胤通と家督が継承された。この系統は千葉氏に謀反を起こすなど（千葉市立郷土博物館所蔵原文書）、惣領家とは異なる動向もみせた。

惣領家は北条氏の他国衆として軍事動員に応じ、小田原合戦では五〇〇騎を動員した（毛利家文書）。合戦後は、婚姻関係を結んでいた常陸鹿島氏のもとへ身を寄せ、その子孫は水戸徳川氏に仕えたという（国分文書）。

国分氏は、印文「龍」の朱印を使用したことも知られている。

〔居城：矢作（大崎）城（香取市） 菩提寺：大龍寺（同市）〕

# 府川豊島氏



戦：原氏・北条氏（他国衆）に従属

下総国府川城（茨城県北相馬郡利根町）を本拠にした国衆。もとは白井原氏の被官であったが、自立化し、北条氏の他国衆になった（佐野家蔵文書）。戦国時代では、貞継・継信という人物がみられる。当時の布川は常陸川水系において流通拠点の一つで、豊島氏も穀物や塩を積んだ船の通行税を免除するなど（福田文書）、流通と深くかわり、存立をはかっていた。印文「直」の黒印を使用したことも特徴といえる。豊島氏は隣接する常陸国の国衆土岐氏との間に婚姻関係を結び、安定を目指した。小田原合戦では、北条氏に従ったため没落したと思われ、その後の動向はみられない。

〔居城：府川城（利根町） 菩提寺：来見寺（同町）〕

# 白井氏



平鎌室・在地領主 ↓ 戦・千葉氏・小弓  
公方に従属

下総国白井城（千葉県佐倉市）を本拠にした国衆。平安末・鎌倉期以来の在地領主。

戦国期の家督は、『千葉白井家譜』（寛文十三年成立）をもとに、教胤―持胤―俊胤―幸胤―俊胤―景胤―久胤と継承されたといわれてきた。しかし、戦国期の古文書や記録類をみると、胤慶―胤縁―胤寿と継承されたとの見解もある。支配領域は、白井庄・印西庄・香取郡大戸庄山之辺である（千葉県立中央図書館所蔵船橋大神宮文書・香取之亮家文書）。文明十一年には、太田資忠軍の白井城攻めが行われた。白井氏は、天文七年の国府台合戦で敗者の小弓公方に属したことで没落、その後再興するも天文十五年千葉氏との争いに敗れ滅亡。

〔居城・白井城（佐倉市） 菩提寺・円応寺（同市）〕



白井城近くにある、太田図書（太田資忠）の墓。  
（撮影：石渡洋平）

# 相馬氏



鎌・室・千葉一族 ↓ 戦・古河公方・築田氏・北条氏に従属 ↓ 江・徳川家家臣（旗本）

下総国守谷（森屋）城（茨城県守谷市）を本拠にした国衆。家紋は四目結である（上杉家文書）。室町期は下総千葉氏の庶家、その後千葉氏から自立し、古河公方に従属した。

弘治年間頃、相馬家中内での内紛を契機に、築田氏の統制下に入るものの、自立化をはかり、結果的には北条氏の他国衆として存続していくことになった。

相馬氏が本拠にした守谷城は水上交通にも深く関わっていたとされ、古河公方足利義氏の移座も予定されたほどであった（静嘉堂本集古文書）。

相馬氏は小田原合戦まで北条氏に従い、同合戦で一〇〇騎を動員した（毛利家文書）。同合戦後は、徳川氏に仕え、旗本として存続した。

〔居城・守谷城（守谷市） 菩提寺・海禅寺（同市）〕



下総国（千葉県松戸市）

# 高城氏



下総国小金城（千葉県松戸市）を本拠にした国衆。室町時代は千葉氏の家臣、戦

国期のはじめは原氏の被官であった。戦国期の家督は、胤忠→胤吉→胤辰→胤則→胤重（胤次とも）と継承された。

高城氏は基本的に小田原北条氏の他国衆として活躍したが（小田原衆所領役帳）、永禄三年からの上杉謙信関東侵攻の際には、上杉氏に味方した。そこでは、「井けた二九よう」の家紋を持つ「下総衆」として記されている（上杉家文書）。

永禄四年には、古河公方足利義氏が小金に移座しており、東国においても重要な地であった（野田家文書）。上杉氏撤退後、高城氏は北条氏に再度帰属。胤辰から胤則への家督譲渡の際、胤辰が重体であったため、北条氏が胤則の所領・家臣

室：千葉氏家臣 ↓ 戦：原氏・上杉氏・北条氏（他国衆）に従属 ↓ 江：蒲生家家臣・徳川家家臣

継承を安堵した（高城文書）。

小田原合戦では北条氏の味方として、七〇〇騎を動員し（毛利家文書）、高城氏自身は小田原城に籠城した。同合戦後は、会津に転封となった蒲生氏郷に仕え、その後徳川家に従った。高城氏の領域支配では、当主が遠方に出陣中などに使われた印文「胤吉」の黒印が特徴的である。

〔居城：小金城（松戸市） 菩提寺：広徳寺（同市）〕



高城氏黒印（提供：千葉県文書館）

南関東

下総国（茨城県下館市）

# 水谷氏



室：戦：結城氏に従属 ↓ 江：与力大名

下総国下館城（茨城県下館市）を本拠に久下田城（下館市）などにも勢力を持ち、下総結城氏に属した国衆で、藤原秀郷の流れをくむ一族とされる（水谷家譜）。戦国期の家督は、勝氏→勝国→勝之→勝吉→持治→政村→勝俊→勝隆と継承された。

水谷氏は宇都宮氏・多賀谷氏・笠間氏らと境目争いを繰り返しながら、勢力を拡大し、結城氏と匹敵するといわれるほどの実力を付けた。水谷氏は徳川家康とも誼を通じていた。小田原合戦後、羽柴秀吉の養子で家康の次男秀康を結城氏の跡継ぎにする外交交渉を担った功で、石高五万石の結城氏の与力大名として江戸時代も生き残った。

〔居城：下館城（下館市） 菩提寺：定林寺（同市）〕

# 築田氏



鎌…在地領主 ↓ 室…鎌倉府奉公衆 ↓  
 戦…古河公方・上杉氏・北条氏(他国衆)に  
 従属 ↓ 徳川家家臣(御留守居与力)

築田氏は下総国関宿城(千葉県野田市)・水海城(茨城県古河市)を拠点とした領域権力で古河公方足利氏の家臣である。築田氏は下野国梁田御厨(栃木県足利市)を名字の地とし、鎌倉府奉公衆として活躍してきた。

戦国期の家督は、持助→成助→政助→高助→晴助→持助→助縄→助利と継承された。実名は古河公方足利氏から一字を拝領することも多く、また婚姻関係を結ぶ場合もあった。

築田氏は関宿城を本拠にしていたが、永禄元年に古河公方足利氏が関宿城に移座するという事態になった。これは、古河公方のバックにいた北条氏が意図したものであり、築田氏は代わりに古河城(茨城県古河市)へ移された。関宿城をとることは、一国をとることに匹敵する(喜連川文書)という認識が北条氏にあったためである。つまり、築田氏は東国でも屈指の地域を本拠にしていたのであり、北条氏にとっては築田氏を関宿から移すことで、その勢力を抑止しようと考えたのである。

そうした状況は、永禄三年の上杉謙信による関東侵攻によって変化する。ここで築田氏は上杉謙信に属し、反古河公方・北

条氏の立場をとる。その結果、築田氏は本拠関宿城へ復帰を果たした。

しかし、こうした立場をとったため、以後北条氏による関宿城攻撃がされるようになる。そして、天正二年閏十一月に関宿城は陥落、築田氏は支城水海城(茨城県古河市)に移ることになった。関宿の地は、流通・交通の要衝であり、一国に匹敵するほどの場所だっただけに、築田氏の勢力は衰えたとやわざるを得ない。築田氏は古河公方足利義氏の赦免を得て、再び古河公方・北条氏に服属したのである。築田氏は天正十年閏十二月に足利義氏が死去後、水海城主として北条氏の他国衆となった。

天正十八年、小田原合戦で北条氏が滅亡するが、築田氏は徳川家康に仕え一〇〇〇石の知行を得て存続した。当時の築田家当主助利は、大坂夏の陣に子息権三郎とともに従軍した。その際、真田勢の家康本陣への攻撃によって、助利は息子ともども討死してしまった。ここで男子直系が絶えたものの、権三郎の妹を通じて御家再興となり、以後は江戸幕府御留守居与力として活躍した。

(居城…関宿城(野田市)・水海城(古河市) 菩提寺…東昌寺(五霞町))

## 千葉氏



平・豪族 ↓ 鎌・室・守護 ↓ 戦・独立勢力、のちに北条氏に従属

下総国で最大勢力を誇った地域権力。桓武平氏良文流の豪族で、代々千葉介を名乗り、下総守護であった。戦国期の本拠は本佐倉城（千葉県酒々井町）で、家督は康胤―輔胤―孝胤―勝胤―昌胤―利胤―親胤―胤富―邦胤―直重と継承された。

千葉氏は享徳の乱で本宗家と庶家が対立、結果的に馬加（千葉県千葉市花見川区霧張）を拠点としていた千葉康胤が本宗家の家督についた。その後、文明十六年六月、太田道灌の下総国東葛地域侵攻をうけ、輔胤・孝胤父子は佐倉を軍事拠点として取り立てた。これが千葉氏の本佐倉城移転である。

孝胤の跡を継いだ勝胤の時期は、戦国期のなかで最盛期といってもよい。このとき勝胤は本佐倉城下の整備に努め、寺院の建立なども行なった。加えて、本拠の周辺と領国の境目、関係の深い寺社に自らの子息を送り込み、領国支配を固めた。また、勝胤は和歌を愛好し、周辺には歌壇が形成されるなど文化面でも発展に寄与した（雲玉和歌集）。

昌胤―利胤―親胤の時期、千葉氏は危機を迎える。利胤が家督継承後約一年で世を去り、跡を継いだ昌胤四男親胤は弘治三

年、家臣に毒殺され、わずか十七歳で没した。千葉家内で内紛が生じたのである。

このようななかで千葉家の立て直しをはかったのが昌胤三男胤富であり、それを支えたのが家宰白井原氏であった。胤富は鶴の黒印を用いるなど領国支配を進めた。

胤富の跡を継承した邦胤は、龍の朱印を使用した人物である。邦胤の時期、再び千葉家は困難な局面を迎えた。天正十三年、邦胤が家臣に殺害されてしまったのである。後世の記録では、儀式の際家臣の一鍛田孫五郎が放屁したので邦胤が叱責したところ、それを逆恨みし、殺害したという個人の恨みが原因とされる。だが、実際は北条氏政の娘を妻としていた邦胤をめぐり、親北条方と反北条方の家臣間で内紛があったと思われる。邦胤の跡は北条氏政の五男直重が千葉氏の家督を継ぎ、北条氏の他国衆としての性格を強めた。このようなこともあり、小田原合戦では三〇〇騎を動員し（毛利家文書）、北条氏の味方に立った。北条氏の滅亡後、直重は高野山に追放、のちに赦免されて阿波蜂須賀家に仕えた。

〔居城〕本佐倉城（酒々井町） 菩提寺…海隣寺（佐倉市）

安保氏

武蔵七党の一つである丹党の中の一氏族。秩父綱房の次男・安保実光を祖とし、武蔵国安保郷（埼玉県神川町）を本貫地とする。戦国期には、当初は上杉氏方、後に後北条氏方に転じていたが、永祿12年の武田信玄による御嶽城（埼玉県神川町）攻撃以降、確認できなくなる。

鎌倉府

南北朝～室町にかけて、関東を統治するために幕府が設置した政庁。將軍足利氏の一門を鎌倉公方としてトップに据え、その補佐役に関東管領として上杉氏を設け定めた。管轄していた「関東」とは関八州（相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・下野・上野）のほか甲斐・伊豆の10ヶ国で、明徳3年に

陸奥・出羽も統治下に治めることになった（8年後に奥州探題が設置され、奥羽両国は統治から外れる）。鎌倉府内では、公方と管領の対立が多

く見られた。これは、公方が幕府からの独立を強く望んでおり、一方の管領は京都との結び付きが強い関係で惹き起こされていた。応永23年、禪秀の乱が勃発。禪秀は伝統的豪族層の支持を得て戦ったが、持氏は幕府の支援を受けて禪秀勢を下した。その後、持氏は強

権的となったため、関東の武将たちは幕府の京都扶持衆に任せられるようになった。この状況に危機感を抱いた持氏は鎌倉扶持衆を配置し、支持者を獲得していた。永享10年になると、持氏は関東管領・上杉憲実の討伐を開始（永享の乱）。憲実

は持氏と京都との間を調停していたため、幕府は6代将軍義教は憲実を支援。結局義教は翌年、持氏と嫡子を殺害し、一時期、公方が不在となった。その後、持氏の遺児・成氏を公方としたが、再び室町幕府および上杉氏と対立、享徳の乱が勃発した。幕府の命を受けた今川勢に鎌倉を抑えられてしまったため、成氏は下総国古河城を本拠地とし、鎌倉府は崩壊した。

足利政氏

戦国期の武将で、足利成氏の子（一四六二—一五三二）。2代目の古河公方。延徳元年に家督を継承。長享の乱では、扇谷上杉定正の死を受けて山内上杉家の支持へと転身した。永正元年には伊勢盛時（北条早雲）や今川氏親と武蔵立河原で戦っている。永正3年以降、嫡子・高基と対立

し、さらには次男・義明とも不仲となり、永正の乱が勃発する。これによって古河城を離れることになり、小山氏を頼って下野国へと向かう。その後、不本意ながら公方の座を高基に譲り、出家して武蔵国久喜で余生を送った。

足利成氏

室町期の武将で、鎌倉公方持氏の子（一四九七）。享徳の乱の引き金を引いた人物。関東管領上杉憲忠を謀殺して鎌倉から下総国古河へ移って古河公方となり、文明10年まで戦い続けた。

関東幕注文

年紀や作者の記載は無いものの、長尾景虎（のち上杉謙信）が永祿3年に越山した際、彼に従った北関東の武士を中心に書き連ねた文書とされている。紙を貼り継いで記載しており、一部脱

漏がある。上野が8つ、下野が3つ、そのほか古河衆・築田家風・武州之衆・羽生之衆・岩付之衆・勝沼衆・常陸之國・安房国・上総衆・下総衆と、地域の領主を「衆」として把握し、それぞれがどのような紋を用いていたのかが記されている。

蒲生氏郷

戦国後期の武将（一五五九—一六三九）。羽柴秀吉の下、近江日野、伊勢松ヶ島、陸奥黒川の城主となった。近江国日野（滋賀県日野町）に生まれ、織田信長に仕えた後、秀吉に従った。本能寺の変後、安土城内の信長一族を居城である日野城へと逃がし、明智光秀との対立姿勢を明示、秀吉傘下に加わった。天正11年の賤ヶ岳合戦の勝利後に亀山城（三重県亀山市）を与えられる。翌年の小

牧・長久手合戦でも戦功を挙げて伊勢松ヶ島城を、小田原合戦後には陸奥会津を与えられた。その後、黒川城も天守を備えた鶴ヶ城として様相を変えたと共に、城下町の開発・整備も行った。黒川の前城主であった伊達政宗に対しては、葛西大崎一揆を煽動していると京都に報告しており、ときに対立状況を示していた。

扇谷上杉氏

室町期において、関東地方で勢を張った上杉諸家の一つで、戦国期には河越城を本拠とした。鎌倉公方に仕えた。当初はそれほど勢力も強くなかったが、永享の乱および結城合戦後に当主・上杉持朝が台頭し始めた。これは、関東管領職をほぼ独占的に継承してきた山内上杉氏の当主・憲実が隠退したこと、さらに後継

者への幕府の懸念が関係し

ていた。扇谷上杉氏には家

宰として岩付太田氏が存在

していたが、文明期になる

と両者の対立が鮮明化し、

同18年、当主・定正は家宰

の太田道灌を暗殺している。

その後、長享の乱・永正の

乱を経てかなり勢力が減退

し、小田原北条氏による相

模侵攻を許すことになった。

天文15年には当主・朝定が

山内上杉氏と和解して河越

### 伊勢宗瑞(北条早雲)

戦国期の武将で、小田原北

条氏の祖(？一五一九)。関

東に覇を成した北条氏の基

礎を築いた。現在では実名

が盛時、出自は室町幕府政

所執事の伊勢氏とするのが

定説。備中国に居住した伊

勢氏で、父は盛定、在原莊

(岡山県井原市)の半分を支配

していた領主であることも

わかっている。実姉の招き

を受けて駿河今川氏の許に

下向し、長享元年の今川氏

親の家督継承に尽力。その

後、伊豆・相模国に侵攻

し、伊豆では堀越公方足利

茶々丸を御所から放逐し、

相模では大森氏や三浦道寸

を討滅した。

**太田資正**

戦国後・末期の武将(一五二

二九一)で、武蔵国岩付城

(埼玉県さいたま市岩槻区)城

主。越前同盟でも資正の処

遇が問題となり、元亀元年

には上杉に絶交されるなど、

一時期両者の関係が危ぶま

れながらも、一貫して北条

氏と対立していた。その姿

勢は天正期でも変わらず、

小田原合戦の際にも羽柴秀

吉の幕下に参陣しているが、

結局岩付に戻ることは叶わ

なかった。

**越前同盟**

武田信玄に対抗するため、

永禄12年に上杉輝虎(のち謙

信)と北条氏康(氏康罹難後は

氏政)が結んだ軍事同盟。

信玄が甲相駿三国同盟を破

つて駿河国に侵攻したこと

で、氏康は敵対関係にあつ

た輝虎との和解を模索し始

め、同年早々、輝虎に和睦

を申請した。輝虎は当初同

盟には消極的だったが、2

月頃には横瀬(由良)成繁の

居城・金山城(群馬県太田市)

で講和に向けた話し合いが

もたれた。同盟の条件は、

①8月15日以前における輝

虎の信濃出兵、②氏政の子

の入嗣(当初は後の太田資五郎

結局氏康の子が入嗣)のちの景

虎、③輝虎による上野・武

蔵の領有権の主張、④足利

義氏・古河公方と容認、輝

虎・関東管領職と容認、で

あつた。しかし、同盟成立

後も両者の足並みは揃わず、

③が最大の問題として存在

していた。基本的には上野

国が上杉氏、武蔵国が北条

氏と定められたものの、最

終合意にいたるまでにはさ

らに日数がかかり、結局交

渉は翌年四月まで継続され

た。その後、同盟推進派の

氏康が病没したことで、氏

政が同盟を解消した。

**道真↓太田道真**

室町中・戦国前期の武将で、

扇谷上杉氏の家宰(一四一一-

八)。相模国守護代を務め

た。実名は資清。文安4年

には「道真」と見え、この

頃すでに出家していた。永

享の乱で、持氏の残党を討

つた武将として確認される

「太田備中守資光」が初見と

される。享徳の乱の最中に

嫡子道灌に家督を譲り、両

者共同で河越城(埼玉県川越

市)および江戸城(東京都千代

田区)を築いた。その後も扇

谷上杉氏に従い、上杉氏の

当主・政真が五十子陣で討

死すると、他の老臣衆と共に

政真の叔父定正を家督と

する評定を行っている。

**道灌↓太田道灌**

室町後期の武将で、扇谷上

杉氏の家宰(一四三二-一八

六)。武蔵守護代。文安3年

に元服、康正2年に父・道

真から家督を譲られる。そ

の後も扇谷家2代の当主・

上杉政真および定正に任せ、

享徳の乱、それにとりなう

た。長尾景春の乱において活躍

した。父・道真と共に河越

城(埼玉県川越市)および江

戸城(東京都千代田区)を築い

たが、これは扇谷上杉持朝

の命令で、古河公方足利成

氏に対する防御施設の構築

が必要だったためである。

拠点となる城を築いた道灌

ではあつたが、その後も各

地を転戦し、駿河今川氏の

当主・義忠が討死した後

の家督継承問題にも介入して

いる。その間、武蔵国内に

おいて長尾景春が足利成氏

と共に挙兵したため、道灌

は軍を相模・武蔵に向けて

動かし、豊島泰経・泰明兄

弟を江古田・沼袋原の戦い

で破つて石神井城も落して

豊島氏を滅亡させた。さら

に、用土原の戦いで長尾景

春も破り、景春の上野国内

への封じ込めに成功した。

その後、主君・定正に謀叛

した。

南関東

131

守護の代官で、任国で信頼

の置ける家臣を代官として

設定してその国の支配を行

った。

守護代

守護の代官で、任国で信頼

の置ける家臣を代官として

設定してその国の支配を行

った。

守護代

守護の代官で、任国で信頼

の置ける家臣を代官として

設定してその国の支配を行

った。

守護代

の疑いをかけられ、定正の居館・糟屋(神奈川県伊勢原市)に招かれた際に暗殺された。

### 渋江氏

武蔵七党の一つ野与党であった大蔵経遠が渋江郷(埼玉県さいたま市等)に居住し、その名を称したとされる。

### 安房里見氏

上野国の新田氏の庶流で、房総を支配した戦国大名。義通が古河公方足利政氏に從っており、その後の古河公方家の内紛である永正の乱では、小弓公方・義明を奉じて小田原北条氏等と戦闘を繰り返した。天文2年、すでに壮年となっていた里見義豊が叔父の里見実堯を討伐。それに対して実堯の实子・義堯は、翌年北条氏の力を借りて里見義豊の稲村城を攻撃、義豊を自害させ家督を継承した(天文の内

証「稲村」の姿。この時点で里見氏の系統が変化することから、義豊以前を「前期里見氏」、義堯以後を「後期里見氏」と区分する。その後、天文7年に第一次国府台合戦で里見氏と北条氏は

激突。北条氏に敗北を喫するも、越後上杉氏の援護を

取り付けて領国を拡大させ、さらに対抗を続けた。永禄

7年の第二次国府台合戦でも再び北条氏に敗れるも、

天正5年に両者は和睦した。その後、羽柴秀吉に接近し

て安房・上総のほか下総南部を領し、さらに小田原合

戦で秀吉の幕下に参陣したものの、惣無事令(私戦の停

止および増目の不可侵令)に違反したことが明確になった

ことで、安房国のみとなった。慶長19年の大久保忠隣

改易事件に連座し、伯耆国倉吉に転封。元和8年の当

主・忠義の病没によって改易された。

三船山合戦

永禄10年8月に、里見義弘が上総国三船台(千葉県君津市・富津市)で北条氏政と戦

った争い。永禄7年に第二次国府台合戦で勝利した北

条氏は、上総の北部・西部・東部を領域下に治め、

その上で里見義弘の居城・佐貫城への攻撃を考慮して

三船山山麓(三船台)に要害を築こうとした。危機感を

覚えた里見義弘は三船台の北条軍を先制攻撃、里見方

が北条勢を打ち破った。両者の水軍衆の激突もさまざま

じく、結局水陸からの挟撃を恐れた北条軍が相模国に

撤退することになった。なお、この合戦で北条方の太

田氏資が討死している。

梶原政景

太田資正の次男(一五四八一六一五)。梶原氏の養子とな

ったため、太田氏でありながら梶原の名字を称した。

弘治3年、古河公方・足利義氏の下で元服し、義氏に

近侍していたが、永禄3年の長尾景虎の越山に父・資

正が從つたことを受けて、政景も岩付城に移った。永

禄7年、兄の氏資が北条方となったため、政景は城内

に幽閉されてしまうが、脱出して常陸佐竹義重の家臣

となった。当初は小田原北条氏との対立姿勢を崩さな

かったが、天正12年の沼尻合戦以降において突然、北

条氏の下に走っている。その後、佐竹氏の下に戻って

小田原合戦を迎え、関ヶ原合戦後には佐竹氏の秋田転

封に從つたが、最終的に結城秀康に仕えている。

井俣(「猪俣」)

武蔵七党の一つで、武蔵国那珂郡(埼玉県美里町)を中心に勢力を張つた武士団。

宗長

室町後期の連歌師で、宗祇没後の連歌界の指導者(一四四八―一五三三)。その一方で、今川氏の外交顧問でもあった。駿河国島田(静岡県島田

市)の鍛冶屋の出身で、号は柴屋軒。当初、駿河今川義忠に仕えていたが、上

洛。宗祇を師として連歌を学び、さらに大徳寺の一休

宗純に帰依した。各国の武将・公家との交際も広く、

当代随一の文人・三条西実隆や周防内義興、山内上

杉房能とも交流を持ち、今川氏親の外交活動の一端を

担った。

北条氏照

都八王子市)城主、のち八王子城城主(同也)。「如意成就」の龍の印章を使用し

て、八王子の領域支配を行った。小田原北条氏の家中

では、「取次」として多くの外交文書にその名が確認

される。永禄2年、武蔵滝山城主大石定久の娘を娶つ

て家督を継承し、当初は大石源三氏照と名乗った。の

ちに八王子城を居城と位置付けて築城を開始。その一

方で北条氏による各地の戦闘に加わり、関宿城攻撃や

御館の乱、の神流川合戦や天正壬午の乱にも彼の名が

確認できる。小田原合戦では、兄で北条家宗家の家督

をすでに譲っていた「御隠居様」氏政と共に主戦論者

であったため、合戦敗北後に切腹を命ぜられている。

北条家所領役帳

「小田原家所領役帳」とも。

○。当初は武蔵滝山(東京

戦国大名小田原北条氏の一  
族や家臣が知行する郷村の  
名称や、貫高(知行高)・状  
態等を記し、それに対して  
「役」として動員されるべ  
き人数が書き上げられた台  
帳。原本は残されていない  
が、氏康の治政期にあたる  
永禄2年に作成されたこと  
がわかっている。

### 国府台合戦

下総国国府台城(千葉県市川  
市)で小田原北条・安房里  
見阿氏を中心に房総の諸将  
が争った合戦で、第一次合  
戦(天文7年)と第二次合戦  
(永禄6~7年)があった。第  
一次合戦の契機は、古河公  
方足利政氏とその子・高基  
との内紛で、高基の弟も還  
俗して足利義明と名乗り、  
小弓公方と称されて参戦。  
上総国真里谷(千葉県木更津  
市)武田信清と里見氏が義  
明を支援し、徐々に勢力が

拡大してきた。対して北条  
氏綱は真里谷武田氏の内訌  
を口実に、小弓公方勢と対  
立し始めた。古河公方も巻  
き込んで多くの諸将が国府  
台に集結し、氏綱と義明は  
激突した。結果、義明は戦  
死して氏綱の勝利が決定し、  
国府台一帯は北条領となり、  
小金城(千葉県松戸市)主高  
城胤吉の所領となった。永  
禄6年に里見義堯の子・義  
弘と北条勢と国府台近辺で  
合戦があったものの、両軍  
は一時撤退した。さらに翌  
年、里見義弘は上杉輝虎  
(のちの謙信)による太田資正  
および同康資の救出を依頼  
されたため、国府台に陣を  
張った。康資は北条方だっ  
たが、上杉に内応してい  
た。北条氏も対応を始めて  
出陣したものの、緒戦は里  
見勢が勝利した。しかしす  
ぐに北条勢が盛り返し、結

局第二次合戦も北条方の勝  
利で終わった。

### 上杉顕定

室町後期(戦国前期)の武将  
で、関東管領(一四五四~一五  
一〇)。越後上杉家の出身で、  
山内上杉房頭が五十子陣で  
陣没してしまつたため、養  
子となった。享徳の乱の終  
結時以降、顕定は扇谷上杉  
正定と対立していたため、  
扇谷家家宰の太田道灌が定  
正によって暗殺されたこと  
をきっかけに長享の乱が勃  
発。顕定が有利になり、さ  
らに明応3年に伊勢宗瑞が  
相模に侵攻してくると古河  
公方もも親密になり、小田  
原北条氏と協調した。公方  
・政氏の弟を養子として迎  
え、顕実と名乗らせ顕定の  
後継者とした。また、長尾  
景春を越中国に放逐して越  
後国の支配を試みたが失敗、  
永正7年に長森原合戦で敗

北、自害した。

### 万里集九

室町期の臨済宗の禅僧にし  
て歌人(一四二八~)。文明  
期には美濃斎藤妙椿とも交  
流があり、同17年には太田  
道灌の招きで下向、江戸城  
に滞在し、詩文集『梅花無  
尽蔵』を著している。

### 北条氏綱

戦国前・中期の武将で、相  
模国の戦国大名(一四八七~  
五四二)。伊勢宗瑞の子。版  
図を伊豆・相模のほか武蔵  
半国、下総の一部そして駿  
河東部にまで拡げた。大永  
3年6~9月の間に姓を  
「伊勢」から「北条」に改  
めた。大永4年には武蔵攻  
略を開始、江戸城を領域下  
に組み込んだ。扇谷上杉朝  
興との対立も激化、同5~  
6年にかけて、甲斐武田  
氏・扇谷上杉氏・山内上杉  
氏・古河公方・真里谷武田

氏・小弓公方・安房里見氏  
らと紛争を繰り返した。天  
文4年、駿河今川氏と共に  
甲斐武田氏を攻撃したが、  
翌年今川氏輝が突然死没し  
て義元が家督を継ぐと、義  
元は武田氏と同盟を結んだ。  
そのため、氏綱は富士川を  
越えて興津(静岡県清水区)ま  
で攻め込んだ。

### 北条氏時

戦国期の武将で、(次男?)  
五三二。北条氏綱と同腹の  
弟。伊豆那代もしくは韭山  
城主で、玉縄城主となった。  
北条為昌

### 北条為昌

戦国期の武将で、領域内  
は朱印を用いて文書を発給  
している。武蔵国河越城  
(埼玉県川越市)、小机城(神奈  
川県横浜市港北区)、相模国三  
崎城(同県三浦市)などの城  
主もしくは城代となつて  
いる。

### 福嶋氏

美濃国を発祥の地とする。  
遠江国に移った時期はは  
つきりしないが、永享4、5  
年には今川範政の使者とし  
て近侍していたようである。  
高天神城を中心に勢力を広  
げたようだが、浜名方面  
(浜松市北区)でも勢を張つた  
一族がいたらしい。氏親の  
側室となつた女性もおり、  
今川氏の「一家」であつ  
た。天文5年の花蔵の乱で  
今川義元と敵対し、敗北。  
一族の九郎は小田原北条氏  
に仕え、その子息が玉縄北  
条氏の祖・綱成とされて  
いる。

### 国人

室町期の地方豪族のことで、  
守護代などに対して、主に  
在地生え抜き土豪をさす  
語として用いられた。本貫  
の地名を名字に名乗る者が  
多く、まさに在地にいる  
「直接」の領主と言える。

# 公事

賦課する事象をいい、古代・中世においては、人を客体とした賦課を公事、土地を客体とした賦課を年貢と称し、主に臨時に課せられた賦課であった。神役や寺役、守護役など、賦課の主体側が名付けたものと、段銭・棟別銭・川手・市庭銭など、客体から名付けられたものがある。ただ、戦国期になると、大名が実施する裁判のことを「公事」と称してもいる。

## 評定衆

戦国期、各大名家内の評定衆については不明。しかし評定＝会議のことを示すため、様々な事件・事象の議決員と把握される。

## 結城秀康

戦国末～江戸前期にかけての武將で、徳川家康の次男（二五七四～一六〇七）。家康嫡

男の信康切腹後における後継者の予定であったが、小牧・長久手合戦後の和睦の条件によって、羽柴秀吉のもとへ養子として送られ、羽柴秀康を名乗った。その後、結城家へ養子に出され、関ヶ原合戦では家康ら東軍勢が西に戻る間の会津の抑えとして、景勝を牽制する役目を担った。合戦後には50万石以上の加増と共に越前北庄に移っているが、このような待遇を受けた武將は彼だけである。

## 武田信吉

江戸初期の武將で、徳川家康の五男（一五八三～一六〇三）。天正10年に甲斐武田氏が滅びると、家康は穴山信君の嫡男・勝千代（武田信治）に名跡を継がせた。しかし彼は16歳で没してしまい、武田氏に所縁のある家康側室が出産した子・万千代丸信

吉を家督とした。家康の関東移封によって下総国小金城（千葉県松戸市）に入り、関ヶ原合戦後には常陸国水戸に移され、武田家の遺臣が家臣となって武田氏が再興されたが、子息なく早世した。

## 鎌倉府奉公衆↓奉公衆

古河公方は、京都の幕府に擬した機構を設置していた。奉公衆も同様だが、幕府のそれよりもはつきりしない点が多い。ちなみに幕府奉公衆は、幕府職制の一つとして整備されたもので、將軍に近侍した御家人を指し、五ヶ番に編成されたので、番衆や番方とも呼ばれた。將軍直属の軍事力で、若党や中間なども含めると、5千～1万人ほどと推測されている。

## 足利高基

戦国前期の武將で、3代目

の古河公方（一四八五～一五三五）。上杉氏への対応をめぐる父・政氏と対立した永正の乱では、岳父・宇都宮成綱の許で永正9年に古河公方となり、山内・扇谷両上杉氏と対峙。その後、山内上杉氏と和解、次男の晴直を養子として上杉氏に入れ、憲寛を名乗らせた。晩年には嫡男の晴氏と対立、これが関東享祿の内乱の要因ともなった。

## 足利晴氏

戦国前～中期の武將で、第4代の古河公方（一五〇八～一五〇九）。足利高基の嫡男で、將軍足利義晴の偏諱を受ける。小田原北条氏綱の没後に氏康と対立、山内・扇谷両上杉氏と結託して、天文15年、北条勢と決戦。河越合戦で敗北して求心力を失い、同21年には北条氏を外戚とする子の義氏に家督を譲つ

た。翌々年には古河城を攻撃され、相模国波多野（神奈川県秦野市）に幽閉された。その後も北条氏に反発しようとして試みたが、結局失敗に終わった。

## 北条氏規

戦国中～後期の武將で、小田原北条氏康の五男（一五四一～一六〇〇）。美濃守。相模三崎城（神奈川県三浦市）主で、伊豆韮山城（静岡県伊豆の国市）の城代。幼少期、北条方から駿河今川義元への人質として駿府で暮らした。その折、三河からの人質であった松平竹千代（のちの徳川家康）と知り合ったという。家康のほか武田・上杉・伊達・菅名など、多くの大名への取次となっていた。中でも羽柴秀吉による北条氏への上洛要求に関し

ては、秀吉→家康→氏規と伝えられており、氏規が北条氏の窓口であった。小田原合戦では韮山城に籠もるが、家康の説得で開城。後に高野山へ蟄居。その後、許されて狭山城主となり、子孫は狭山藩主となった。

## 房相一和

天正2年、小田原北条氏の攻勢は凄まじく、6月には安房里見義堯が死没していたこともあり、南方では上総と安房の国境にまで北条勢が迫っていた。上総の酒井氏や土岐氏を領域下に組み込んだこともあり、北条氏と里見氏で7月頃に和議が成立した（房相一和）。両者の全権大使は、北条方が松田憲秀、里見方が正木頼忠で、国分（領域設定）に関

してははつきりしていないが、内房へ流入する小櫃川と、外房へ流れ込む一宮川を境とし、北を北条、南を里見の領域にしたようであ



る。このほか、いくつかの城を廃城と決め、北条氏政の娘（龍寿院）と義堯の嫡男・義弘の弟（庶長子とも）里見義頼の婚姻を決めた。その後、義弘の嫡子・梅王丸と義頼との内訌や正木憲時の乱等もあったが、北条氏は2つの乱には介入せず、同盟を継続させた。

### 朝倉宗滴話記

朝倉宗滴の経歴や家訓、戦陣訓をまとめたもの。宗滴が語ったことを彼の家臣がまとめたとされる。成立年代は不明だが、近年、永禄3年頃との推測が提示された。宗滴は戦国大名朝倉氏の一族で、実名は教景。

### 伯耆国国替（慶長19年安房里見氏伯耆国への改易）

慶長5年、安房里見氏の当主・義康は館山藩主に任ぜられ、弟の義高も上野板鼻主となった。しかし、同18

年に義高が突如改易となり、翌年には義康の子・忠義も安房国を没収された。これは、慶長18年に忠義岳父の大久保忠隣の手力である大

久保長安が没した際、鉱山奉行等を歴任していた長安による金銀の不正入手があったという本多正信・正純父子の虚偽報告を家康が認め、さらに長安と豊臣恩顧大名との親近性に家康が不快感を抱いたこと等に起因する。刑は忠隣の花婿である忠義にまで及び、伯耆倉吉3万石とされたが、100人扶持程度しか糧米は与えられなかった。元和8年に忠義は病没、後継者がなく改易となった。

### 池田光政

江戸前期の武将で、備前岡山藩初代藩主（一六〇九—一六二二）。元和2年、父の死没により家督を継承し姫路藩主

となつたが、翌年、幼少であるため因幡鳥取に移された。

### 清和市場諏訪神社

千葉県君津市。

### 内藤家長

戦国中〜末期における徳川家康の家臣（一五四一—一六〇〇）。父・清長は一向門徒で、三河の一向一揆に加わったが、家長は家康に従い、一揆鎮圧に奔走した。家康の関東入部に伴い上総国佐貫に入る。慶長5年には烏

居元忠らと共に伏見城に入り、石田三成の攻撃で討死。その功で、子の政長が1万石の加増を受けている。

### 神崎庄

大戸庄に近接する荘園のため、千葉県香取市周辺と判断される。

### 大戸庄

千葉県香取市佐原大戸。

### 在地領主

中世の都や「都市」部以外の在地（地方）において、農民や非農業民等を直接的に支配する権限を有した領主のこと。

### 臼井庄

八千代市および四街道市の全域と、佐倉市の西部、さらには船橋市豊富までがその範囲と考えられている。

### 印西市

千葉県印西市。

### 大戸庄山之辺

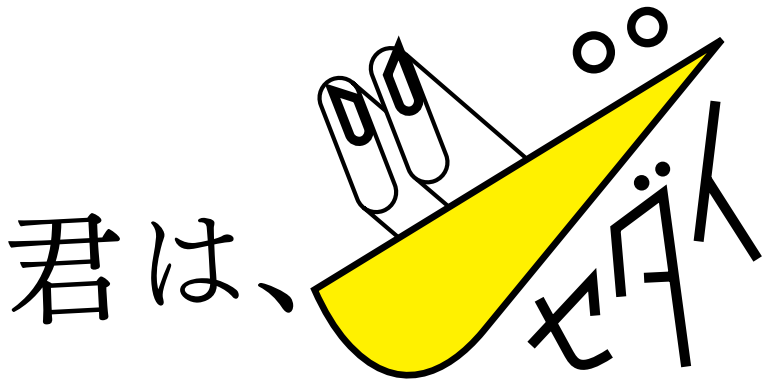
香取市山之辺周辺。

### 阿波蜂須賀家

系譜ははっきりせず、尾張国蜂須賀郷（愛知県あま市）を押さえ、尾張守護の斯波氏に仕えていたが、正勝の父・正利の代に美濃斎藤氏に従ったという。正勝の子・家政は、当初から羽柴秀吉に従って多くの合戦に出向

き、天正14年に阿波の大名となった。子の至鎮は、徳川家康の養女の婚姻関係を結び、関ヶ原合戦では東軍として参戦して戦功も挙げたため、本領を安堵された。

川家康の養女の婚姻関係を結び、関ヶ原合戦では東軍として参戦して戦功も挙げたため、本領を安堵された。



君は、

ゼダイ人

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ**  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**会いに行ける編集長**

毎週「つながる」毎月「会いに行ける」。新書出版を目指す新人と編集者による「知の格闘」を生放送！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**